

ぶどうの木



1986・No16

基督伝道隊
八幡前田教会
大濠公園教会
戸畑教会



目

次

巻頭言……………榎本牧師(1)

牧師館訪問記(六)……………取材班(2)

エステル会旅行記……………筑山寿々子(18)

エステル会旅行に参加して……………野村美恵子(20)

ただついでに行くだけ……………伊規須泰子(23)

婦人会研修旅行感想記……………野村末義(26)

私の仕える主は生きておられる……………伊規須太郎(27)

洗礼を受けるまで……………金生一郎(36)

ラボン……………古野とみ子(38)

せん方つくれども……………広田田寿(42)

御霊に導かれて……………大田邦子(45)

沈丁花……………野口米子(54)

耐え得ぬ悩みはない……………K & K(55)

聖書と科学について……………伊規須太郎(60)

恵みを数えよ……………古野とみ子(64)

いざなえの杖……………上野米子(66)

母の救い……………筑山寿々子(68)

神様の裾にすがって……………伊規須泰子(71)

すべてが新しくなった……………野口美加(75)

神の子トントンちゃん……………古野とみ子(76)

テレホン聖書……………伊規須太郎(80)

心のスナップ……………上野米子(84)

短歌……………上野米子(86)

命の御言葉……………瓜生美知子(86)

主の門……………古野とみ子(88)

万才……………X・Yの書簡(90)

新しい病院……………野口米子(91)

聖言を通して……………匿名(91)

正野のおじいちゃん……………熊谷千代子(93)

永遠の課題(蛙の子は蛙)……………古野とみ子(94)

千葉時代の子供達の思い出……………正野真宏(96)

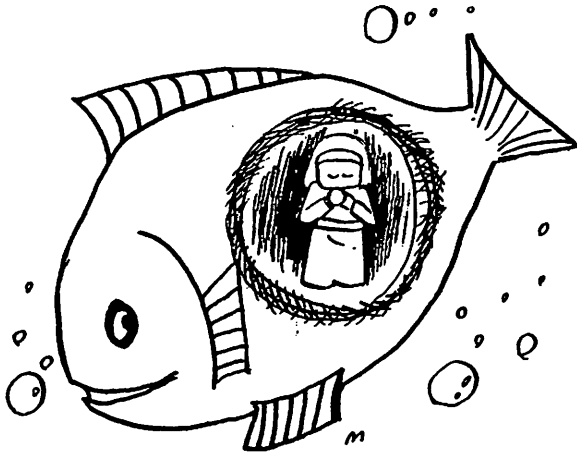
柴田しか姉をしのびて……………都島あさ子(101)

編集後記……………(103)

卷 頭 言

榎 本 牧 師

あなたがたが実を豊かに結び、そして私の弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう。
(ヨハネ 15・8)



「ぶどうの木」も主の豊かな御恵みで、十六号へと成長させて頂き、今迄二本の枝が伸びて、盛んに実を結んで居ましたが、今年から戸畑教会と呼ぶ新しい枝が成長して参りました。

どの枝にも、実が豊かに稔りました。夫々熟度によって甘い・淡泊な・濃厚な・円熟・未熟・新鮮・枯淡、夫々の味を持って居ります。どうぞ一粒一粒の中に包まれて居る、主の豊かな恵みの美味を味わって更に多くのよき実を結ぶ枝と成長させて頂き度いと願って居ます。

牧師館訪問記（六）

―「ぶどうの木」取材シリーズ―

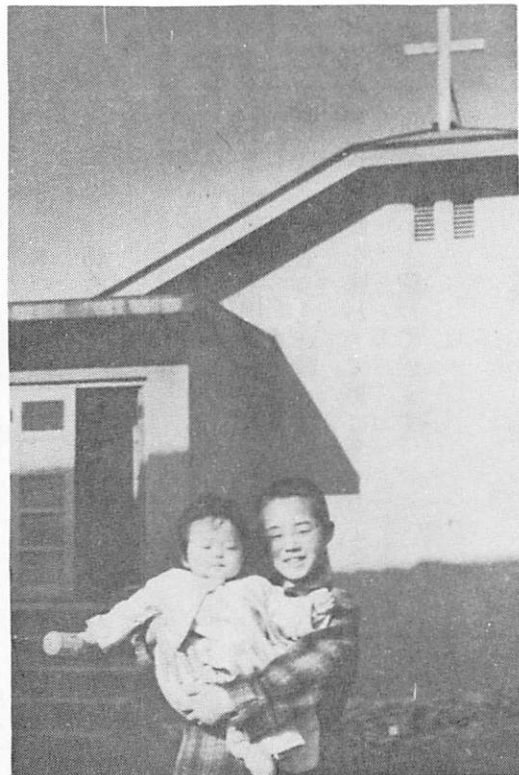
先生 前は、戦災にあって家族はしばらく長崎県の五島で生活したこと、戦後間もない昭和二十二年に河本さんが会堂を献堂なさって、私はそれを機会に他の働きを一切やめて牧会に専念することにしたこと、そして昭和二十三年に二人の子供を相次いで天国に送ったことを中心にお話しましたね。今日はどこからお話しましょうかね。

―子供さん達の成長の過程でいろんな事があったと思いますが、そのお話の前に、会堂が与えられて先生も伝道一本に打ち込まれることになりました。その後どのように教会が形成されていったか、どのような方達が来られるようになったかお話下さいますか―

一、丸橋 幸 一 兄

先生 そうですね。献堂が済んで一週間後に先年亡くなった丸橋さんが来られたことを話しましたかね。

それはね、当時、西南女学院の今西先生という音楽の先



生に来てもらって、讚美歌指導をしてもらっていたんです。奥様 今西先生とは、私達が疎開先の五島から帰ってきて、のぞみヶ丘にある西南の宿舍をお借りしていた時にお交りができて、私達にはお風呂がないのですから、よく先生宅でお風呂に入れていただいたり、食事をよばれたりしていたんですよ。それで私達が教会ができてこちらに来たものですから、讚美歌指導をお願いしましたら、喜んで引き受けていただいたわけです。

先生 それで上月さんという方が、当時製鉄所社宅にいた丸橋さんの隣りにおられて——確か上月さんは今本(現中村)さんと同級生じゃなかったかと思いますが——今西先生の讚美歌指導に行っているのを見て、丸橋さんが「あんだ、どこへ行くのか」と言うので、教会のことを聞いて、「自分も行っていいか」と言って、来るようになったんですね。奥様 それまで丸橋さんは、春の町にある金光教に行っていたのですが、何かのことでその先生がおられなくなったので、行く所がなくなってしまった。何処かに行きたいなと思っていたところに、キリスト教の教会が新しくできたことを聞いて、自分を連れて行ってくれんかということであられた。それが二十二年九月第一日曜日に献堂式があった次の日曜日でした。

——それでは、丸橋さんは新会堂の第一号信者ということになるのですね——

先生 そうですね。それからの丸橋さんは、集会という集会、ほとんど休むということがありませんでしたね。

——丸橋さんが、自分がナツバ服しかないから、教会に行きにくいと言われたのは、この当時のお話ですね——

先生 そうです。その頃のことです。

奥様 とにかく食物もなくて……みんなもそうでしたけれども、着る物もなくてね。特にあちらは戦災に会いましたからね。

先生 でも丸橋さんは、製鉄所に勤めていたので特配などありましたから、まだ良い方でした。それでも子供さんを育てるのに、随分大変だったと思います。

二、熊畑兄と青空子供会

奥様 それから来られたのが、熊畑さんです。

その年のクリスマスの祝賀会で、お昼を弁当持ち寄りでしたのですが、私達は家庭持ちでない一人者の人達のためにカレーを作っておりました。そこに熊畑さんが見えたので「あなた、カレー食べませんか」といったら、喜んでね。

それから来るようになったんです。

先生 その前に一度来たことがあって、以来プツリ来なくなりましてね。何かの時、西門前の所で会ったので「あなた、どうして来ないの。今度クリスマスだから、おいでいよ」と言ったら「それなら行く」と言って来た時に、今のカレーの御馳走があったというわけです。

尾倉町を上がったところにユウエイ館という製鉄の独身

寮があつて、そこから通つておりましたね。

自分が救われてうれしくてたまらない、それに自分が子供の頃不遇だったから、小さい子供達が何の楽しみもなくて可哀想だからといって、給料日にグローブやバットを買つてきて、独身寮のすぐ上の広場で遊ばせながら、青空子供会をやつたんです。

奥様 あの方は、ひどいでもりでね。(歌を歌う時はでもないんです。)けれども、自分を克服して何とか人前でも話をしようと、どもりながら子供会をやつたわけなんです。自分はこうして救われたんだと一生懸命話してね。



先生 そうして子供達がだんだん集まつて来るようになった時、前田幸江さんが千鶴ちゃんをおんぶして子守りしていると、どこからか讚美歌のような歌が聞こえる。どこだろうかと思つてみたところが、熊畑さんの青空子供会だったんです。

奥様 あの前田さんは、娘時代、大阪かどこかで藤村壮七先生から洗礼を受けていたんです。その後、あちこち満州にも行って、そこで結婚して、それからここに來て教会を探したけれども、洗礼を受けた時のような教会が見当らなかつた。それでこれはだめかなと思つて、家も忙しいし教会にも行っていなかつたんですね。

そういう時に讚美歌を聞いたというわけですが、そうしてその青年の話を聞いていたところが、本当にすばらしかつたのです。それで「あなた、どこの教会に行きよるね」と聞いたら、前田教会と聞いて「それじゃ、自分も行く」といつて来るようになったんです。

その当時子供で、子供会に導かれたのは、下松薫子(現下川)さんなんです。それに水村君のお母さん、みんなあの近くでしたね。

池田操さんは、子供会に出てなかつたけれども、その頃

教会に来ていて、帰りに熊畑さんに送ってもらってましたね。

先生 池田操さんは、どうして来るようになったのかな。

奥様 池田（当時広瀬）さんは、本城にあった八幡競馬場の馬券売りをしていてね、帰りに教会が建っていたので、来てもいいでしょうかと尋ねに来られたんです。それから来るようになりましたね。それも二十五年でしたね。

池田さんのお友達が水村さんです。水村さんは、当時春の町にあった映画館で働いておられて、後に池田さんも働くようになりました。水村さんは結婚されて、池田さんはそのまま働いておられたわけです。

先生 青空子供会は、その後、前田さんの庭でやるようになって、前田新さん、伊智子さん、千鶴ちゃん達、それから前田さんは身寄りのない子供を三人預っておられてね、狭いお家でしたけれども、本当によくされましたね。それぞれ独立させなさいましたよ。

それから、前田さんの下の方に青年がおってね、熊畑さんと協力して、いつかクリスマスをやったことがありました。下松薫ちゃんがマリヤさんをやってね、そういう時代がありました。

熊畑さんのことで、何かほかにあったかな。

——熊畑さんが洗礼を受けた時のことをよく説教でお話されますが——

先生 そうそう、熊畑さん達の洗礼式は、春の桜の咲く頃、日曜日の昼に河内でやったんです。そこへ行く途中で、花見で酒に酔って千鳥足で帰ってくる人達を見て、自分もかつてはこの中の一人だった、それが今日は生まれ変わって神の子とされたと、本当にもう表現できないような喜びをもって感謝しましたね。

熊畑さんのお父さんは、佐賀で大変な酒呑みだったそうです。一樽すえておいて朝から酒呑んで、熊畑さんも小さい時から吞まされていたそうで、親子で吞んでいたと言っていました。そういうことでお酒が好きで、救いに預った最初の内も、神様が与えて下さったお酒、感謝していただきますと言って吞んでいたそうです。

それから、あの人が来だして初めの頃、うれしくてうれしくてね、給料もらったからとバナナを買って持って来てくれたのかなあ。あの頃のバナナは貴重品でしたから、豪華なものいただいたとびっくりしたことを思い出しますね。その後で高木さんもそうでしたね。いつもお話するよう

に、初めて礼拝に出て、終つて前に出て「これからここで信仰させていただきます」と挨拶して、その次牧師館に来た時はバナナを持って来てね。それで子供達が大喜びしてね。(笑い)

奥様 熊畑さんはよく会堂の掃除に来てくれました。まだ高木さん達が見えない頃、一人でやっていました。私と主人がやっているのを見て、僕にやらせて下さいと来られて……。先生 讚美歌を大きな声で歌いながら、喜んでやっていたのですが、ある時、パタッと声が聞こえなくなつたんです。

それでどうしたんだろうと思つて、そつとのぞいてみると、それこそ鬼瓦のような顔——後日談ですが、この事を私が何かに書いてあつたのに、鬼瓦のようなと書くところを鬼のようなと書いてあつたんですね。これを見た熊畑さんが「先生、鬼のようなとはひどいですなあ」(笑い)と言つて笑つたことがあつたんです——涙を流してね、感謝していたんです。

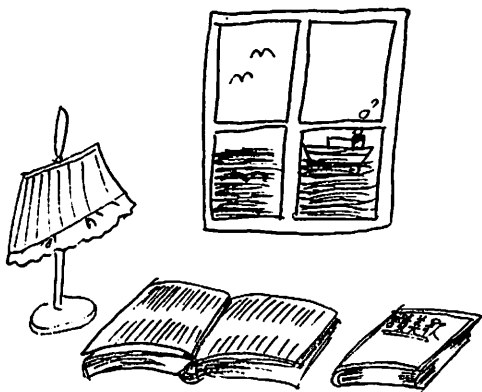
後で聞いたら、自分の汚い汚い心を思い、今こうして神様の宮を磨かせていただくとは何とという幸いなことだろうかと思つと、感激して歌えなくなつたんだと……。

奥様 今は東京の練馬区にいらっしゃいます。

先生 製鉄所を辞めて、東京の自衛隊に入つたんです。今はもう自衛隊も満期して、信用金庫に入り、これも満期して現在、信用金庫の重要書類等を輸送する会社で働いておられます。

奥さんは、ずっと美容院をしていらっしゃる。

——何年ぐらい前田教会におられたのですか——
奥様 二十五年に來られて、高木さん達ともしばらく一緒にしたから、四、五年だつたと思います。



三、内 宮 兄

先生 内宮さんが来るようになったのは、熊畑さんと変わらないう頃だったかもしれないね。熊畑さんが子供会をやった時、しばらく内宮さんも手伝っていたからね。

奥様 内宮さんという方は、皆さん御存知ないでしょうね。大変熱心な方でした。

先生 その人はね、大分県の立石出身なのですが、初めメンソレータムを買ったら、その中にキリスト教について知りたい人は連絡すれば資料を送るといのがあって、それを出したら、大分の日出教会を紹介されてそこへ行っていらしいんです。

その後、製鉄に就職して八幡に出て来たんですね。

この教会に来るようになったのは、寮で何かあって叩かれたといつて来たので、一晩泊めてあげました。そして、腹が立って仕方がないというので、お祈りをして、エス様のお話をして、汝の敵を赦せとおっしゃるから……、父よ彼らを許し給え、あの人はわからないでそんなことをしているのだから、もうそんなに腹を立てないで、こっちもいやになるから許してやりなさいよと言ってあげて、それから集会に来るようになったわけです。

最初は純真ないい信仰をもっていたのですが、ある時から献身したいという気持ちになって、神学書を読まなくていいですかと言うものですから、読まん方がよいと言っていたんですが、とうとう読んだらしい。

その結果が、信仰から頭に行ってしまったんです。そうしたらもう力が抜け、懐疑的になって人間的な理解で解釈しようとするもんだから、とうとう聖書が信じられなくなりました。

奥様 十字架が全くわからなくなってしまったんですね。いくら十字架の話をしてあげても、自分は罪人だ、罪人だばかり……。

先生 罪の呵責は強いんだけど、信仰に結びつかない。可哀想だけど……。

奥様 気の毒に思って、どんなに話してみてもわからない。とうとう罪に耐えかねて自殺しかけたことがあります。

うちのポストに遺書を入れて、居なくなりました。

さあ、大変だということで、皆んな総出で——その時はもう高木さん達も来ていましたけれども——探しました。行きそうな所、帆柱山とか門司のめかりとか……交番にも頼んでおまわりさんも一緒にね、手分けして一晩が

かりで探しました。行けない私達は、ここで祈ってました。そうしたら、朝の五時頃電話がかかって、鹿児島にいたんです。お母さんが鹿児島の出かなくなかで、桜島で死のうと思っただけでも死にきれずに帰りますという電話でした。もう感謝しましたね、皆んなで……。そして、帰るのを待つて、とにかく教会に泊りなさいといって……。

それからしばらく来てたんですけど、信仰には至りませんでしたね。

先生 それ以来、山に登るのが趣味になってね。山で知り合った人と結婚しましたよ。

そして結局、共産党に入りましたね。人間的な正義感になると、共産党に行くようになるのでしょね。共産党というのは、人間的に筋の通ったものですけども、それを人間の実現するには、暴力革命を認めなければならぬということになるわけです。

奥様 ノイローゼのようになりましたね。

具体的に罪を犯しているから、警察の署長まであやまりに行きたいと言ってます。それで、今、自分に婚約者がいるけれども、その人と別れなければならぬと思うので、先生、その人に自分が帰れなくなった時は、よろしく伝え

てくれというわけです。そして、その人の名前を書いてくれるけれども、顔を見ていませんしね、どうしようもないので、とにかく引き受けたということで、主人が署長さんの所まで連れて行ったんですよ。

警察署であの人、何と言ったのかしら。

先生 何かね、お金を拾って使ったとかで、お金を持って行って、私はこういうことで神様の前に罪を犯しましたから申し訳ありません、このとおり返しますから、何ともお仕置して下さいって言ったらしいんですね。

そうしたら、署長さんが「そうか、よくわかった。それじゃそれをもらおう」と受け取ってから「あんたがそこまで心を入れかえて新しい人生を送ろうというのなら、そのお祝いにこれをあなたにあげる。もうこのことは時効にかかっているから、法律的には責任はない」と言われて、彼は喜んで帰って来たわけです。もう警察でしぼられるのではないかと心配していたところが、そういう風だったでしよ。

奥様 それで彼は罪許されてよかったですけれども、何せ十字架が信じられないものだから、教会に来るのがきついです。

私達の牧師館には来たいんですけれども、教会の信仰が持てないで離れていきました。

先生 それでもね、選挙の時などは、共産党の用事で水巻あたりへ行く途中、ちょっと寄って、顔見てね。そういう事がありました。

四、初期の頃のメンバーと思い出

奥様 教会の近くにあるタバコ屋さん、以前はガラス屋さんで、その井上さんという人が来ていました。この方はとも熱心で、青年会のメンバーでした。洗礼も受けたと言っていたんですけれども、お母さんが反対されて、長男だからヤソにはさせんと言うてね。荷物をもって朝出ようとするのを引き止めて、結局受けさせなかったんですよ。

後にその人がぐれたことがあって、そのお母さんがあの時教会に来とれば、こんなことにならなかつたのにね。と云ってました。今でも会うとバツが悪いような顔をしてね。

それから、井上さんの子供さんが、花尾中学の何階から落ちて、とても助からないという状態だったので、それが助かったんです。全快した時、鏡を教会に献げたりしてね。まあ、心がないわけじゃないんですね。

先生 初期の頃に来ていた人達は、丸橋さん、熊畑さん、内宮さん、前田さん、岩隈さん、今本（中村）さん、山下さん……山下さんは、内宮さんの友達ということに来ていました。妹さんといつも一緒でしたが、結婚する時も一緒でしたよ。

そういうことで、ポチポチ新しい魂が加えられて来ました。戦後、焼野原の中にポツンと建った目立つ教会でしたし、ほかに娯楽のない時でしたから、割合、若い人達が集まって来ましたね。

教会の上の方に家政女学院というのがあって、そのグループが何人か来てましたね。

当時、河本実さんが独身で、青年会の中心になってクリスマスの劇などをやりました。ある時、アンクルストム・ケビンをやつてね、その時のトム役の人が、墨をまっ黒に塗つた手を壁にベタッとやったものだから、後に手形が残つてね（笑い）。

奥様 その当時（二十六年）、洗礼を受けた人が九人いましたね。畠山栄子さん、高木さん、伊規須さん、泰子さん、東さん（泰子さんのお兄さん）、池田操さん、あと三人はどなたでしたかね？

——それにしても、そうそうたるメンバーで、一番実りのある年だったわけですね——

先生 夏だったかな、伊規須さん、布団袋を下宿に放り込んで教会に来たのは……。

奥様 伊規須さんは、最初、津屋崎教会に出ておられたのです。当時はまだ海軍服でね、スラーツとやせてましたよ。

五、聖会とバザー

先生 献堂三年目だったかな、藤村壮七先生に来ていただいて、聖会を開きました。二年続けてしましたかね。

奥様 それから、アメリカの中古衣料のバザーをやったことがありました。

先生 教団の川越教会の方が、教会でバザーをやるなら材料を提供し、売上げの何%とかをあげるといいますが、私としてはそういうことはしたくないけれども、皆さんが経済面で助かるし、教会に水道がなかったので、それをつける必要からやっただけです。

奥様 そしたらよく売れましたね。あまりよく売れたものだから、またしてくれと言って来ましたよ。

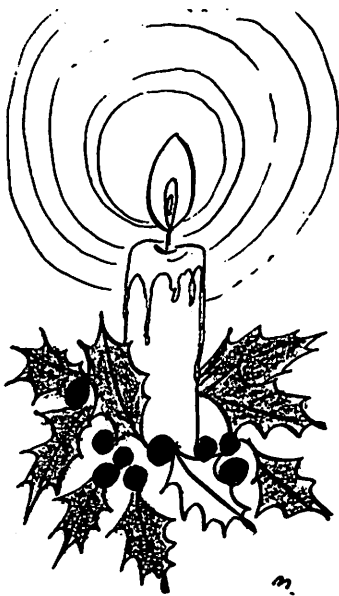
二回目の分で、藤村先生の聖会の費用にしたんです。

その聖会で恵まれて、高木さん達が洗礼を受けるようになったわけですね。

先生 私はバザーの方が主となっては、信仰的によくないと考えて、それっきりやめました。

奥様 その頃は何かと大変でした。集会にゴザが欲しかったです。特に早天祈禱会は寒いから、座ろうというんです。七輪を一つ置いて、それにヤカンをかけて、湯をシャンシヤン立てて、湯気を見ながら、暖かいと思いつつ(笑い)……それでも、ないよりましでした。

皆さんがゴザに座布団を敷いて、それに座って、六時から七時までの早天祈禱会に出て、それから勤めに出てたわけですね。



そのゴザを買うのにお金がないのですから、それじゃ

ぜんざい会をしようかということになって、河本のおばあちゃんがいっぱいこしらえて来たところが、みんな食べる食べる。高木さんは十何杯か食べましたよ。

その売上げで、ゴザを買いました。

そういうことで与えられたものですから、本当に暖かい感じがするわけです。乏しい中で、祈ってみんな心を合わせて買ったものですから。

先生 今考えると、ぜんざい会で出来たのではなくて——ぜんざい会は赤字だったかもしれない——河本さんが、それでした事にして、〇〇して与えられたと思うんです。

奥様 あるクリスマススの時、河本のおばあちゃんが、大きなイナリずしを沢山作ってね。奥さんは夜遅くまで、何べんも炊いて作ったんです。それを売るつもりだったんですが、ほとんど残ってしまったんですね。

そうしたら、それを全部河本さんが買い上げて、みんなにおまけに下さって下さった。そのお金で、路傍伝道に使う太鼓を買いました。

六、路 傍 伝 道

奥様 その太鼓というのがね、丸橋さんの息子さんがキャバレーに出ていて、そこで使っていたドラムですから、皮が張ってあるところに派手な絵が入っているわけ（笑い）、それをもって路傍伝道に行くのですから、今考えてもおかしいやらで……。

——見る人は、何の宣伝隊が来たかと思ったでしょうね——
先生 当時は、そういう楽器類が手に入らなかったからね。みんなを寄せるには、太鼓が必要だったわけですよ。

——路傍伝道は、しばらくやられたのですか——
先生 やりましたね。何年間かやりましたよ。祇園町から平野町方面が主でしたかね。説教は私にして、お証をみんなでやりました。ほとんど毎週、きまって出て行きましたね。土曜日、日曜日だったと思います。

奥様 そこに米屋さんがいてね。その人は意地の悪い米屋さんでね、配給を取りに行った時、文句が多かったんですよ。その人が路傍伝道を聞いてたと見えて、態度が変わりましてね「あんたんとこの主人はすごいね。元気がいいね」（笑い）。説教を聞いたってんでしょうね。

先生 それまで肉声でやってましたが、東さんが電気に詳しく

い人ですから、スピーカーを使うようになりました。テレビもない時代だし、物珍しきで人が集まってましたね。

一緒に行った教会の人はサクラになって、一生懸命に話を聞いている。その内、人が集まって来ると、後ろで祈っています。終ると、トラクトを渡して教会に来るように奨めるわけです。

とにかく一言でも、神の御言が人々の心の中に留めて下さるよう、行く前に祈り、帰ってまた祈りました。

奥様 そういうことで、伊規須さん、高木さん、東さん達の信仰が固くされたと思います。

先生 だから、お証するというのは、自分の信仰が固くされる秘けつですね。人に証しなかったら、いつまでも信仰が成長しないんです。証した言と命を借しまないことによつて、問題にも勝っていくんですね。

その当時、教会はだんだん人も加えられて来ました。

アシュラムを始めていたスタンレー・ジョウズ博士が言っていました。今の日本はアメリカの占領下で教会の門戸が開かれているので、今が伝道の絶好のチャンスだ、これを逃すと、また共産主義の力が伸びてくるから、その時教会が一生懸命働いても、もうなかなか浸透しない、だから

今頑張らなければだめだというようなことを盛んに言っておりました。

でもチャンスというのは、神様の手の内で、こっちがあいいう時こういう時と決められない。すべての時が時なので、今がその時だと私は考えています。

奥様 二十六年頃、ラクアさんという宣教師が、音楽伝道に見えたことがあります。

中央町の市民広場で、トレーラーの荷台を舞台にして、マリンバ、トランペット、ハーブで演奏したのだから、みんなびっくりしたんですよ。当時、そういう楽器の生の演奏を聞いたことがなかったのでね。それは素晴らしかったですよ。

先生 市内の教会が協力してね。

宣教師を水巻の大正鉱業まで私が迎えに行ったんです。

奥様 会場へ行く途中で教会に寄ってもらって、ケーキを食べてもらったんです。先方はケーキなんか食べつけているでしょうし、私の方はなけ無しのお金をはたいて買ってね。感激したんですよ、私かね。遠い所をわざわざ伝道に来て下さってと。

先生 やっぱ若くないとだめね(笑い)。

あの頃が、日本で一番キリスト教に関心を向けた時代でしたね。占領政策を通して、キリスト教とはこういうものかなという安心感をみんなに与えてましたし、また、進駐軍に就職する時、クリスチャンは歓迎されていましたから、猫も杓子も教会へとという人が多かったですね。その中から本当に主に立ち帰る人は少なかったと思います。

七、高木 兄

先生 高木さんは、当時、ソ連の抑留から引き揚げて、製鉄の枝光寮におる時、友達が製鉄病院に入院したので、見舞に行った。その時、賀川豊彦さんの伝道集会の広告を見て、ひとつ聞いてみてやろうと行って見たところが、たいがいの講演会では野次が飛ぶのに、みんながシーンとして聴いているのにびっくりした。ハア、ここには何かがあると感じて、それから教会を紹介してもらったのが、枝光教会だったんですね。

それから寮が東浜寮に移ったものですから、どこか教会をと思っていたところ、電車の中からの教会を見つけたので来てみた。そうしたら感激しちゃって、先にも話したとおり、前に出て挨拶をしたというわけです。

私もびっくりしましたね。礼拝が終って、ズカズカと前に出て、みんなの方にクルッと向いて「この教会で信仰しますから、よろしく！」というでしょう。

——やっぱり、信仰が徹底する人は、どこか違いますね。私達だったら、初めて来た時は後ろの方に座り、終わったらサッと帰るところです——

八、安部タマエ姉

先生 安部タマエさんが来たのも、二十六年頃だったと思います。

奥様 その頃は、病気で体が不自由な上に、ものが言えなくてね、ベンチの後ろの方で顔も上げきらなくて座ってました。

話しかけても「ア・ア・アノウ……」。精神的にもショックを受けていたんです。

あれからズーッと今日まで、守られ強められて来ましたね。礼拝の時もよく祈ってました。

以前は、製鉄病院の看護婦さんをしておられたのです。そういう関係で、中央町の野田医院をよく知っていて、三男の誠がひどい病気になった時に紹介してもらったんです。

九、誠さんの病氣

先生 誠が生まれたのが昭和二十六年三月で、三ヶ月になった時、肺炎をやって、それから肺浸潤をやったのかな。

奥様 最初が肺炎で、それから水疱瘡です。

肺炎が良くなって、もう明日から来なくていいですよ、さっきの野田先生に言われて、よかったねといって帰ってきたら、ここにボツンとおできができたんです。それが翌日になったら、ワァーと広がりましたね。それが水疱瘡……体が弱っているとところに、医院でもらったわけです。

それがひどくてですね。体も頭の中も……抱っこできないんです。

先生 水疱だけならいいのだけれど、膿をもってるんです。

野田さんが心配して、これは天然痘じゃなからうかといってくれたくらいです。熱は高いしね。

奥様 それで交代で抱いてました。かゆいので泣くんです。

それが一週間でかかれて、やっとよくなったと一息ついた頃、またパァーと熱が出て、それが高いんです。そして、乳を飲まなくなったものですから、これじゃいけないからと市立病院に連れて行きました。

そうしたら風邪でしようと言われて、風邪薬をもらって

帰ったんです。

先生 初めは、私達も肺炎やったり、水疱瘡やったりして、体も弱って体力も落ちたから、日射病だろうと考えていました。

奥様 ところがなかなか良くならない。それでもう一度市立病院へ行って話してみたいです。

先生 その時の院長が小児科専門の先生でね。

奥様 その院長が来ていますけど診てもらいますかと主治医が言ってくれたので、お願いしました。その時はもう院長先生は診察が終って部屋に戻られた後だったので、わざわざ降りて来られて診て下さいました。そして、ツベルクリン反応をしてみましようといっって、まだ赤ちゃんですが、それを接種して、二日後に見せに行きましたら、早速、X線撮影をしてみると、肋膜炎で水がたまっていたんです。

これを飲ませなさいと言われて、パスという薬をもらってきたのですが、三ヶ月の赤ちゃんだし、なかなか飲まないので。にがい薬ですしね。量が多いんですよ。

そうこうしている内に、薬も飲まなまま十日近くなりました。それで、野田先生にそのことを話すと、ストレブ

トマイシンがよいのだけれど、健康保険ではきかないしね
と一言先生が言われたんです。結局、高いけれどもやりま
しょうねとおっしゃって、当時一本八〇〇円、これを赤ち
やんですから三回に分けてやるようにしました。

一回すると、スーッと熱が引いたんです。それから、だん
だんお乳も飲むようになって……一ヶ月ぐらいかかりまし
たかね。

先生 それもあまり毎日打つと、副作用で耳が悪くなるとい
うことですから、一日おきに打ちましたね。

奥様 それで大分元気になって太ってきて、これでよくなっ
たと感謝している矢先に、一か月ぐらいいして又再発して高
い熱が出たんです。すぐ先生の所に連れて行ったのですが、
先生が御病気で見てもらえませんでした。丁度、主人は路
傍伝道に出て行かねばなりません。

先生 起業祭に市民広場で、市内の教会が交代で路傍伝道す
ることになっていて、前田教会がその当番になっていたわ
けです。

奥様 誠がそういう風で高い熱を出していましたので、今の
八幡東区役所の近くにある病院を紹介してもらって、レン
トゲンを撮ってみたところが肺浸潤でした。

そして、お医者さんから受けあわれませんよ、でもやる
だけのことはやりましようよと、そこでもマイシンを打って
もらって帰りました。

主人は午後から路傍伝道に行かねばなりませんから、二
人で祈ろうといって、この子を主の手にゆだねて、生くる
も死ぬるも主の御手の内だから、神様、一切を捧げますっ
て……。その前に、豊と恵が亡くなっているでしょ。これ
で三番目ですから、何とか助きたい気持ちはいっぱいです
けど、でもイサクを壇に捧げたように、それが主の御旨な
ら捧げよう。もう主だけによりすがるほかない。今までは
マイシンを頼りにしていたけれども、もうマイシンもどう
しようもない状態ですし、一応の処置はしてもらったけれ
ども、もう主の
手に捧げます。

それから主人
は、路傍伝道に
出かけました。
そして、伝道の
御用を終って帰
ったところが、



スーッと熱が下がってね。それ以後熱が出なくなりました。お医者さんから命は受けあえませんと言われたけれども、主が本当に生かして下さったのです。

先生 本当にあの時、アブラハムがイサクを壇上に捧げたように、主の手に捧げよう。主から与えられ託せられた子供だけども、これは主の子供だから主の手に捧げようと捧げました。

捧げてしまったら、もうこちらの戦いは終わりましたから、御用に出かけました。そして、御用が終って帰る時、電車がいっぱいで乗れないから、みんなで讚美歌を歌いながら歩いて帰りました。その時のことを、伊規須泰子さんが印象に残ったらしくて、何かに書いておりましたね。

家に帰ってみると、もう熱は下がっておりました。だから、主に全幅に信頼すれば主は現実に支えて下さる。そういう中で、主が訓練して下さったのだと思います。

先に二人召され、またこういう中を通った。このこと自体は、人間的には随分つらい苦しいと思いますけど、そこで主が、私共にその中を通った者しか受けることができないう恵みを与えて下さったと思うんです。

だから聖書を読むのに、一つ一つが具体的に私達のもの

として受け取ることができるとし、アブラハムが主に信頼して受けた約束が、現実、私共に与えられ、今も真実だと無条件に信頼させていただくことができる。本当に神様は公平な方だということ、身につけていただくとわけです。それからは、どんな問題があっても、なに、主の手に、主の壇の上に自分を捧げていけばいいんだ——もう何があっても、平安をもって主に信頼していけるようにしていただきますね。

それは、神様の大きな恵みでしたね。問題に会う時、右にすべきか左にすべきか、どっちかという時に、いつでも神様に思い切って何もかも捧げて信頼する、そういう道を選んでいけば、主が真実に答えて下さるのですね。

奥様 やっぱり自分でかかえ込んでいる間は不安です。でも、主の手に捧げると、主がすっかり不安を消して下さるんですね。

——頭でわかっている、そこまできけない私達です。——先生 そこを目で見たのが、高木さん達だな。

いつも何か御用ありませんかと顔を見せていましたからね。なるほどと思っただけ。

奥様 誠は、いつも熱ばっかり出してたでしょ。それで骨が

成長しなかったのか、胸がやせて、育つだろうかと思うくらいでした。中学生くらいまでそんなでしたね。それが今こんなに元気になっていて……。

先生 足も大分立ちませんでしたね。島崎のおばあちゃんから、股関節脱臼があるのではありませんかと言われていました。奥様 はわないし、立てないし、その内、いざり出したんです。

先生 足を伸ばしたまま、スキーのようにスースーとね。

そして、いつの間にか立つようになりました。二才か三才でしたね。

それからは割と順調にいきましたけれども、こちらもヒビの入ったカメのように扱うものだから……。

奥様 泣かせないように、言うとおりに言うとおりましたもんですから、わがままになってね。どうなるかと思いましたが。今で言ったら、家庭内暴力になりかねない。

先生 ある時は、自分の思うとおりにならないとそこの戸をけとばしてね。

奥様 これは大変だと思いましたが、中学生になったらこちらもかなわなくなるので、今の内に我を折らなければならぬと、だめなものだめ、どんなに暴れようと知らん

顔をして、我を通さないようにしたんです。

先生 そういう時、タオルをやる鼻の囲りをクルクルやって、その内おさまりましたね。

自分でも気持ちの整理ができないのでしようね。それで、自分の気持ちを聞いてくれんと言っては当り散らして、自分の気持ちをへし曲げることができない。小さい時にやるとけば、無意識の内にピシャッとやるとけば、割にできたのでしようが、それをやらなかったもんだからね。はれ物にさわるようにやったもんだから、何でも聞いてもらえらると思ってしまうんですね。それが聞いてもらえなくなつたもんだから、自分が順応することができなくて暴れたのでしようね。

奥様 家庭内暴力も、そういう所から起きるのだと思います。先生 お祈りしていて、そういうことを教えられたので、これはいけない、肉と欲と情とに死んで、しっかりやらなければいけないと思いましたがね。

子育てについて、いろんな方がそれぞれの経験からいろんな事を言っていますが、子育てはケースバイケースでやるべきで、型にはまって、こうでなければならぬというとはなないと思います。

私共は主の前に祈っていけば、主がその時その時導いて下さるから、その主の御旨に従いさえすればよいのだと思います。それが必要なんです。

なんとか育児法と言われると、すぐそのとおりにやらないかんとその下敷になってしまいうけれども、そうじゃない。あくまでも、主の御導きで、かけがえのないこの子供を託して下さったのだから、子供の使命が何であるかをいつも心において、その使命が果たせるように訓練していくのが、親の責任だと思います。

— どもありがとうございます。 —



エステル会旅行に参加して

筑山 寿々子

「主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはどこしえに絶えることがない」 (詩篇一〇六・一)

主のお恵みで、エステル会の一泊研修旅行に導かれ行かせて頂く事になり、前日、前々日と梅雨を思わせる様な雨でしたが、きつと最善をなして下さる事を……信じて待ち望んでいました。

朝七時四分のバスで家を出掛ける時は、まだ雨模様でした。黒崎発七時五十一分に乗って、みな様と小倉駅で落ち合い、「ひかり」二〇二号車にて全員十六名、榎本先生にお祈りしていただき、ほんとうに楽しい車中の人となりました。

同じ信仰をもっている姉妹方との交わりは何にもたとえがたく、楽しいひとときでした。

岡山迄の車中、小郡あたりでしたかしら、すっかりお天気になり、樹木の緑のあざやかなこと、目にしみるばかりの光景でした。主がお造りになったこの自然の風景を、あらためて主に感謝せずにはいられませんでした。

二時間三十分位の車中もほんとうに短く感じられ、もう岡山だそうですとの声に驚く程でした。

岡山で特急米子までの二時間あまり、又その景色のすばらしい事、列車の線路にそってきれいな川が進行と反対に流れていました。列車は川にそったり離れたりのしばらくの時が、今だに目に浮んで来ます。

しばらくして、川の流れは列車と同じ方向へと流れはじめていました。山頂を越えたのだそうです……。

樹木の緑の一番最高の季節に旅行に導いて下さった神様、又何から何まで御世話下さった大田様に心から感謝と共に御礼申し上げます。

車中のおいしいお弁当も、岡山く米子間の楽しいひとときでした。米子迄の車中は雨が降ったりしていましたが、米子で又乗るかえ安来に着いた時は雨もすっかりやんで、主に感謝しました。足立美術館へと参りました。

横山大観展（黒崎そごう）で拝見してましたので、足立美術館の庭園は、尼子、毛利の古戦場で、勝山、月山などを借景に、滝口、溪流、池をもって構成されると聞いておりましたので、庭園を楽しみにしてました。想像をはるかに越えて目をみはるばかり、お庭と自然との調和、ほんとうに

美しく、どこから眺めてもその見る角度によって異なる景色のすばらしさは、今だに忘れられません。

美術館での日本画のすばらしさ、絵心のない私ですら、幾度となく足を止め、眺めたくなる様な気持ちにひかれました。ゆっくりと見物させていただき、一路玉造温泉千鳥荘にと参りました。おいしく夕食を頂き、夜の集会もゆったりした広間でくつろいだ気持ちで導いて下さり、

「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない」
（箴言三・五）

「すべての道で主を認めよ、そうすれば主はあなたの道をまっすぐにされる」
（箴言三・六）

聖言を与えられ、すぐに自分の知識にたよるおろかな私に教えられました。ほんとうに感謝でした。

三十一日、朝の集会も恵みの中に開いて下さり、
「苦しみにあったことは、わたしに良い事です。」

これによって、わたしはあなたのおきてを学ぶことができます
きました」
（詩篇一九・七一）

「あなたの口のおきては、わたしのためには幾千の金銀、貨幣にもまさるのです」
（詩篇一九・七二）

聖言をいただき、又新たな気持ちで三十一日のスケジュー

ルに出發させていただきます。

和紙のふるさと安部栄四郎記念館でのビデオを通して、紙すきのすばらしさを学び、又小泉八雲記念館、松江城、大根島と、親切なバスの運転手さんがそなえられ、心に残る旅を想い出として見学させていただきました、心から感謝いたします。

私は青海島旅行では腰が痛くなり、倉敷旅行では車に酔って、皆様にご迷惑おかけいたしました。今度の旅行は、ほんとうにお恵みで、一ヶ月位前から足のひざが悪く痛みを覚えていましたが、旅行の間中忘れた様に快調で、あらためて主に感謝いたしました。ほんとうにありがとうございます。一番苦手の旅行記をとのおさそいに驚き、おことわりも出来ず思いつくままにペンを取らせて頂きました。つたない文章をお許し下さい。

主を崇めさせて頂く事しか出来ません。

この旅行について祈って下さった先生を始め、御世話下さいました姉妹や、楽しい旅行にして下さいました皆様に心から感謝いたします。お祈りありがとうございます。



エステル会旅行に参加して

野村 美恵子

出發から

今回は主のお恵みによりまして主人も参加させて頂きました。五月三十日、小倉駅発八時二十五分ひかり二〇二号、遅れない為には少々緊張します。二十八日夜から降り出した雨は二十九日一日中降ってもまだ止みそうにもなかった。予報では三十日午後は晴れとの事でしたが……。

家を出る時は、傘はなくても何とか行ける位の小さな霧雨

でした。主人は傘を持たずに出かけたのを私は小言を云いながら取りに帰ってもらいました。岡山に着いた時は、何と立派なお天気になりました。心もさわやかに伯備線に乗り込み、いよいよ山陰に向ったのですが、中国山脈の真只中、山又山、谷又谷、その間を高梁川たかはしがわと名のる川が右に左にどこから来てどこに流れていくのか恐しく蛇行しています。山の天気と云いますが、つい一時間程前の青空は、これ又考えも及ばなかった大雨です。列車の窓にたたきつけられる雨、重なりあつた山あいから湧き上がる霧は真白い煙が立ち昇るよう、すばらしい雨の風情にみとれながら、あゝやっぱり傘を持って来てよかつた。この分なら山陰はとも晴れてはいまい、と不信仰な現実を目覚めてしまいました。

併し、十三時二十八分米子に着いた時、雨は上がっていません。以来二日間傘の必要はなく、不信仰のみやげとして二本の傘を私は持ち歩く端目になりました。

足立美術館

米子―安来十分、タクシーで足立美術館へかねてから行ってみたいと思っていた。けれど一人ではとても行けない私なので、半ばあきらめかけておりましたが、この旅のメインと

して取り上げて頂いたことに先ずお礼を申し上げます。私にとつてはそれ程嬉しい事でした。又価値ある見学だったと思います。

横山大観他日本画壇の超一流の先生方の立派な直筆を目の前に見る一筆一筆に心と想像とが込められたこれらの絵は、私の心もとらえずにはおきません。只、感嘆の声を内に秘めながら一作一作にゆっくり対面させて頂く事ができました。童画の世界を画いた先生方は、どんな方なのだろうか。メルヘンの世界に自らを置いて、やさしくって、怒を忘れた方かも知れないなあ。そうでなくては、こんな楽しい絵を想像することはできないだろう、等々考え、又目の前に開けたすばらしいお庭に息入れる。大自然の山々をバックに、調和させた人工の庭が混全一体となって広がりを見せ、さき程まで降っていた雨のあの霧が、今も遙か彼方の山に湧いて、そしてこのお庭と続いている。少しの違和感もなく美しい。神様の大庭と人工の庭とを一つにして雨良し、曇良し、天気良し、と今日の一日の旅をおしみなく楽しませて下さった主に感謝しつつ、千鳥荘へ。

一日の終り

昼間、目に見るものをもって楽しませて下さった主は、夕には消えるものでない朽ちない糧をもって更に恵みを増して下さいました。

心を盡くして主に信頼せよ。自分の知識にたよってはならない。
(箴言三・五)

すべての道で主を認めよ。そうすれば主はあなたの道を真直にされる。
(箴言三・六)

あそこまで絵を画かれた先生方も、一朝一夕にしてなされた事ではなく、幾多の困難をのり越えて大成なされた事を思う時、信仰の道にも通じる事を感じました。信仰の歩みにも浮き沈みがあるのを覚えますが、長い間一生懸命歩き続ける事によって、

「私は戦をりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし信仰を守りとおした。

今や義の冠がわたしを待っているばかりである。」

(テモテ 四・七、八)

信仰の戦を立派に戦いぬかして下さる主が、私と共に歩いて下さる幸を新しくして頂き、不信仰な者に対して心の願いに勝って答えて下さった旅でした。それは主があがめられる

為である。

今日一日を通して、先ず主を崇め明日も心をつくして……と第一目を閉じて下さいました。

一同、感謝讚美のうちに夕のいこいに……。



ただ、ついて行くだけで

——エステル会の旅行によせて——

伊規須 泰子

・ 出 発

エステルのように若くはないが、みんな主によって美しい
エステル会の面々、主の業なる自然と芸術を求めての、前田
教会エステル会研修旅行、いざ！ 出発！

時は、一九八六年五月三十日八時二十五分、ひかり二〇二
号へと乗り込みました。二日間のミニミニ旅行記です。

・ 先ずはひかり車中より

袋詰のおやつを戴く、袋の口を開ける楽しさ、色々出てき
て胸ときめく。△聖書をひもとく時の楽しさも、胸がときめ
く▽ これは自分の責任に於いて食べてよろしい。ダイエツ
トを考える人も？ △個人の意志を尊重する主▽

座席は戴いた番号の席、「やあ、よろしく、よろしく」と、
交わりの場となる。井戸端会議ならず、ひかり会議開かれる。
楽しき雰囲気、証の場ともなる。△主との交わりは、これ以

上▽

十時五十六分岡山着、十一時十分やくも五号に乗り換える。

・ やくも五号にて

伯備線とやら、沿線の緑の美しい事！ 霧雨に濡れた緑、
けむった風景△これを見て主をたたえない人があろうか？▽
線路に川がつきまどっている。曲がりくねり、深く、どっ
しりとした趣を見せたり、浅く、かしゃかしゃと気ぜわしく、
ぶっつきありあったり、きゅうと曲がって反対側に行ったり、見
飽きず楽しませてくれた。

お弁当は、二段重ねの豪華版。自然を楽しみ、会話を楽し
み、満腹した二時間三十六分でした。△いかなれば人の子を、
かくも……▽

かくして米子到着。国電、タクシーを乗り継ぎ足立美術館
へ。

足立美術館の庭園は、神様のお造りになった山、川、緑、
雨上がりの、あの爽やかさを借りて（立派でしよう）と、威
張っていました。芸術品には、うなりました。△同じ人間で
も、神様の賜物はかくも違うや？でもでも、何にも無くても
主を知っただけで、十分なのです▽

ここからまた、タクシーで玉造保養所、千鳥荘なる宿へ着きました。

・千鳥荘にて

安道湖は大きい。宿のお風呂から見た夜の湖。早朝、探しても、探しても、湖の周囲の散歩道はありませんでした。

屋上から見た湖の広さ、美しさ。ここは浅いので、しじみ取りの舟が出ていました。小さい、小さい、しじみでした。

△広い広い湖に、小さい小さいしじみ、どうです神様の、み業は！▽

集会は夜と朝、…自分の知識に頼ってはならない、すべての道で主を認めよ…と、この旅行の天候の事でも、さぐられた証、任せて安心主の道です。△積極的に任せよう▽

夕食と朝食には、海の幸たくさん、安道湖特産の小さい、(小指の先ぐらい)のしじみ、蟹、えび、さざえ、魚類、海藻などなど、食して交わる楽しさも味を引き立てました。△一つ一つに神様のみ手を感じるのです▽

さて、翌日の観光は、

マイクロバスで松江観光、「バスは上等でないけど、この天候に免じて下さい(当日晴天)。今日は花子さんがいませ

んが(ガイドさんがついていない)」と言う運転手さんの言葉に楽しい観光が予測されました。△人の一言でさえ人の心に、ほほ笑みを与える、神様の一言はいかならん▽

和紙のふるさと安倍栄四郎記念館、うわー凄い！この頭脳、この業、この執念、出来上がった和紙の美しさ！見事さ！△でも、人の頭脳も、業も、材料も、神様の物でした▽

松江城は駆け足、時間にせかされました。△時は待ってくれません。今の時を活かさなければ▽

小泉八雲記念館と旧居見学。日本の面影として美しい松江の風物を愛したという八雲さんを偲んだ。△こんなに自然を愛した彼は、きっと神様を讃美し続けたことでしょう？▽

武家屋敷では、昔を偲んだ。すべて小型のたたずまい、格式がある。今のぜい沢を感じる。△この当時、生まれていたら主を知ったかな？今の身分を感謝する▽

八雲庵で昼食。三段重ねの出雲そばに舌つづみ。△マイクロバスにしろ、昼食にしろ、すべてクーポンで準備されている。ありがとうと、受けるだけ。主の恵みも受けさえすれば良いのだ▽

さて、最後の観光は中海にある大根島。朝鮮人参とぼたんの花の産地という事、なぜ人参なのに大根島というのだろう。

誰も教えてくれなかった。

由志園という日本庭園に行ったが、庭の造形より、木、水、花、緑そのものが美しい。この中海も埋め立てるということ。△人間はどうしてこう、自然を消していくのだろうか▽

かくして時間に追いかけられつつ松江駅へ急いだ。少々のお土産を買い、十四時四十二分おき五号の乗客となり、山陰線を小郡へと向かった。

・おき五号にて

山陰線は海岸沿い、日本海を見、集落を見、行きと違った感激に浸りました。座席を向い合わせ、おき会議に花を咲かせ、今度は幕の内弁当の夕食で、身も心も満ち足りての、四時間四十分でした。

小郡でひかりに乗り換え、小倉に向かいました。

小倉で、八幡、黒崎方面への乗り換えについて、又々大変、新幹線から在来線への乗り換え時間が三分しかない、どうするか？ うん！ 挑戦しよう！ ということになり、全員では無いが、運動会よろしく走った走った。とうとう走った人は全員間に合った。△主の前にも最後まで望みを捨てず祈り続けよう▽

おかげで比較的早く帰り着いたのであります。

考えてみれば、随分遠い所へ、費用少なく、乗り物の中、宿、見学、観光、食べ物、すべて備えられ、主を称え楽しませてもらったものでした。この陰に祈りをもって準備を下さった方々、また、途中のお世話して下さった方々に、感謝、感激しています。△私の人生の為に十字架上に血を流して備えて下さった道を、歩かせていただいている事に思いを馳せ感激を新しくしました▽ ありがとうございます。

一九八六年六月



婦人会研修旅行に連れられて詠める

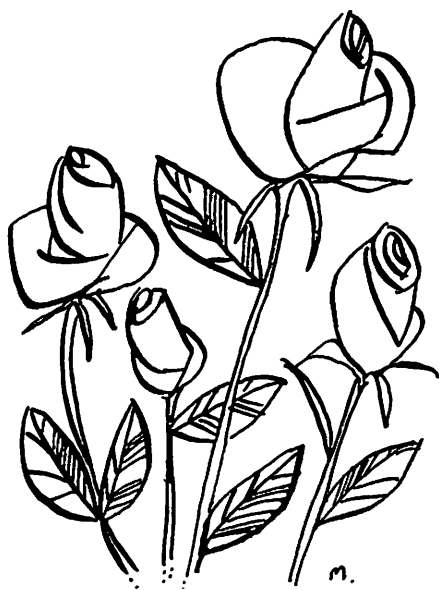
野村末義

五月三十日と三十一日の一泊旅行に、オブザーバーとして参加。

皆さんの荷物になるような僕でしたが、主の憐みと皆さんの祈りに支えられて、溢るゝ恵みを頂き感謝でした。

- 。 旅立ちを 祝うが如し 新緑の山
- 。 天の父の 手になる山河 わが庭よ
- 。 日々是好 親しき友がら 睦まじく
- 。 音も無し 人声もなし 湖畔宿
- 。 緑雨好し 曇も楽し 晴れて又好し
- 。 しじみ採る 舟人早き 宍道湖の朝
- 。 大観の 富士は良けれど 神の山美はし
- 。 松や松 黒松ばやし 松江城
- 。 音に聞く 聖徒の昔 松江の町
- 。 和紙造り 日本一の 伝統あり

(安部栄四郎記念館)



。 雑音と 都塵を離れ 主の前に立つ

(夕と翌朝二回の集会)

。 この旅に 深く学びし 主の御愛

——我は今、汗だくだくの駄句作り——

私の仕える主は生きておられる

新しい事

伊規須 太郎

「あなたがたは、さきの事を思い出してはならない、また、いにしえのことを考えてはならない。見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る、あなたがたはそれを知らないのか」(イザヤ四三・一八/一九)

意識して思い出さなくても、考えなくても、心の奥底にこびりついている人間の常識、過去の経験。

神様は「私を見よ、私は全く新しい事をするのだ」とおっしゃる。「知らないのか」とは質問ではありませんでした。

「知りなさい！知らなくてよいものか！」と言う強いお言葉でした。

ルカによる福音書第二章で、羊飼たちがみ使いの知らせを聞き、直ぐ立って、急いで行って幼な子を探しあてたように、進んで求めるべきでした。どんな捧げ物を捧げるよりも、神様のお言葉を聞いて、従順に祈り呼び求める事を喜ばれる。そうしない事が罪だとおっしゃるのです。

私は今まで、何と受け身の信仰態度だったかと思えます。

目が開かれました、自分の事もひとの事も、人間関係も家族関係も、伝道の方法も——神様はあらゆる面で新しい事を為して下さいますから、私は求めます。

どうかあなたを知らせ、あなたの誉れを述べさせて下さい。あなたはこの為に私を造ったと言われるから感謝します。

(八六・一・二九)

神様との対話

「わたしはわたしの見張所に立ち、物見やぐらに身を置き、望み見て、彼がわたしになんと語られるかを見、またわたしの訴えについて、わたし自らなんと答えたらよかろうかを見よう」(ハバクク二・一)

神様と対話したハバククの書。ユダの暴虐についての疑問？

——カルデヤ人を用いて懲らすとおっしゃる事がまた疑問？彼は真剣に神様に訴えました。

私も神様に、「人間はどちらを向いて生きて行くべきか」を問いました。聞きながら問い、問われてまた答えるうちに不思議な答えが返って来ました。「この幻！」とおっしゃる。???何だろうと思っているうちに、それは来たるべきキリスト、救い主であると分かりました。光に照らされると汚いものが見えて来ます。神様に向かないで人に向く、それだか

ら魂が正しくないのだとおっしゃる。私は神様に問いながら、実は人間の方を向いていたのです。

しかし、そんな私を清めて義人とする為に、イエス・キリストが来て下さいました。そして、ただ、神様に向かって生き、神様と直通する生涯に入れて下さいました。神様は何とデリケートな方でしょう、血の力は何と絶大な事でしょう。ちょっと神様の方に向き直ると、神様は驚くべき事をして下さいました。主は替むべきかな！

常にあなたに心を向け、あなたと対話する者として下さい。

(八六・一・五)

一致は創造に勝る

「わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」

(ヨハネ一七・二二／二三)

航空機事故の後で、遭難者の遺言に感動する。しかし、このヨハネによる福音書一四／一七章は、神の子イエス・キリ

ストの遺言であり、最後のお祈りである事を思うと、身が引き締まる。主イエスがこの地上に來られたご目的、最後の願いは、父なる神、子なるキリストと、信ずる者たちが、完全に一つとなる事でした。

生物の個体は他（の個体または環境）と違うからこそ、個体となった訳で、本来一つとなり得ないものでしょう。臓器移植で拒否反応が起こる事はそれを証明しています。その事を思うと、「一致」とは創造以上に大きな神様のみ業だと分かりました。「エバタ（開けよ）」と、個体の本性を打ち砕いて、一致させて下さるとは、何と驚いた事でしょうか！

私が主のみ名の栄光を仰いだ時、「私」と言う「個」が砕かれました。守る「個」ではなく、攻める「個」、出ていく「個」になりました。神様のお力は替むべきかな！イエス様の救いは尊きかな！

(八五・一一・二二)

エバタ（開けよ）

「天を仰いでため息をつき、その人に「エバタ」と言われた。これは「開けよ」という意味である。すると彼の耳が開け、その舌のもつれもすぐ解けて、はっきりと話すようになった」(マルコ七・三四／三五)

このあとでは盲人の目を開かれた(八・二二)。しるしを
求める人々に、深く嘆息された(八・一二)。パン種の奥義
が見えないか、聞こえないかと嘆かれた(八・一八)。これ
らを読むと、イエス様の溜め息が聞こえて来る。神様の力が
これほど満ち満ちて、注がれているのに、何が妨げているの
か……と言うお嘆きである。また、「ヨナのしるし」……ヨ
ナが三日三晩大魚の腹の中にいたように、イエス様も三日三
晩地中であつた後、甦えられた事……これ以外にしるしは与
えられない。この一事で総てが全うされるのに、何故他にし
るしを求めるのが……と言われる。

「開けよ！」との力のお言葉に私は圧倒された。イエス様
の十字架は、総ての罪を負い去って妨げるものを取り除き、
神様と直通状態にして、見せ聞かせ語らせ悟らせて下さる！
神様のお力は何と驚くべきものだろう！ どこにもここにも

「エパタ」のお声が聞こえる！

主よ、今私の心を開いて、あなたのみ旨を行って下さい。

(八五・一〇・二四)

現代のエリヤ

「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かつて心
を全うする者のために力をあらわされる」(歴代志下一六・九)

アサ王の失敗を叱られる中で、神様はみ旨を語っておられ
る。何としても、ご自分が神である事を知らせたい、心を全
うする者に己を現し、彼の為に力を発動したいと。その手本
として私に預言者エリヤを示された。……彼があればどの確
信をもって「万軍の主は生きておられる」と言えたのは、ま
さしく神様が生きておられ、彼がそのみ言葉に打ち倒された
からに違いない。こうして彼は如何に大きな働きをしたこと
か！

エリヤの名は新約聖書にも度々現れるが、ヤコブ書(五・
一六/一七)には、「義人の祈りは、大いに力があり、効果
のあるものである。エリヤは、わたしたちと同じ人間であつ
たが、雨が降らないようにと祈りをささげたところ、三年六
か月の間、地上に雨が降らなかった……」とある。弱さも持
っていた普通の人エリヤが、神様から義とされたのは、活け
る神の言葉に全く服従したからであつた。

かつての私は、神様のみ言葉に身震いするような事はな
かつた。目も耳も閉じていたからである。しかし、造り主、命
の主である方が、目の前に立っておられると分かつた時、私
は戦慄した。信じるも信じないもない。「イエス・キリスト
の血によって清め、義とする」とのお言葉は私をすっかり変

えてしまった。私の祈りに答えて、天地を振るうような事をされる！　こんな者を主の先備えとまでして下さる！　大きな幻に向かつて忍耐をもって走れ、と主は導いて下さる。

主よどうか今日もしもべの内に、あなたのみ心を為して下さい。あなたの栄光を現して下さい。(八五・一〇・六)

攻撃は最良の防御

「この戦いには、あなたがたは戦うに及ばない。ユダおよびエルサレムよ、あなたがたは進み出て立ち、あなたがたと共におられる主の勝利を見なさい。恐れてはならない。おのいてはならない。あす、彼らの所に攻めて行きなさい。主はあなたがたと共におられるからである。……こうして神が四方に安息を賜ったので、ヨシャパテの国は穏やかであった」

(歴代志下二〇・一七・三〇)

北王国と誼みを結び、大きな汚点を残したヨシャパテ王をも、ダビデの故に憐み給うた神様は、彼の生涯の終りに大きな輝きを与えられた。

神様は私に対しても同様な事をして下さった。……戸畑の会堂が新しくなった時、「主がこの地をあなたがたに賜った

……」(ヨシュア二・九)と約束された。「あなたがた」と

は、「聖霊と私」である。その時、伝道とは神様のなさる事で、私は収穫の働き人として召されていると気付く。そこで私は初代教会の使徒たちのように、「私を見て欲しい」と呼び掛ける事にした。これがテレホンサービス(「テレホン聖書」〇九三(八八一)一〇五九テンゴク)である。神様が責任を持って下さるので将来に不安は無い。既に多くの反響が寄せられている。

総ての事について、「何とかして自分に死んで神様に全く従いたい」と願っていると、「攻めよ」と言われる、攻撃は最良の防御であった。……老齢化の問題、人間の本性に関する問題、日本の宗教風土など……思い煩えば限り無いが、神様は「行け」と言われる。確かに、人間そのものが新しくなれば、何もかも吹き飛んでしまうであろう。

私は今、安息と平穏の中にあるが、内には激しい火が燃えている。目の前の一步に全力を尽くすが、又永遠の望みがある。……かつての私は何も分からず、あらゆるものを恐れていた。しかし、神様の恵みのみ言葉を受け入れた時、ここまで変えられてしまった。

命のみ言葉は替むべきかな！　活ける主は替むべきかな！

(八五・八・一一)

訓練のポイント

「すべての訓練は、当座は、喜ばしいものと思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる」

(ヘブル二・一一)

信仰の故に神様から賞讃された多くの聖徒が、私の回りを囲んでいる。神様は彼等よりも勝った賜物を備えて私を待っていて下さる。一切の重荷も罪も負い去って、走らせて下さる導き主……この一二章の始めの方を読んだだけで、私の心は躍ります。

イエス様と同じ栄光にあずかせようと、私を訓練して下さい……しかし、訓練とは何だろう、罪と取り組むとあるが、私の罪とは何だろうと思っていた。しかし、神様のお言葉に對して、するりと逃げようとする、私の態度こそが罪であると分かりました。「子よ……お前を訓練するのだ」とおっしゃるお言葉が、どれほど驚いたものであるか！

会堂工事に少し関係しても苦勞が多いが、万物をお造りになった主の知恵と力は何と偉大なものだろうか。苦闘しつつ、ついに神様のお言葉にびしりとお従いすると、驚くべき約束が参りました。「私があなたがたを選んだのである。そして、

あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実を結び、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたが私の名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」(ヨハネ一五・一六)と。私が行くと、実が結ばれ、それが残る！ 祈りに答えてとは書いてない、行けばそうなる！ 驚いた事です。

私は、収穫の為に心を砕き、準備をします。決して空想ではありません。神様が「私が行うのだ。私が主だ」、「万軍の主の熱心がこれをするのだ」、「私はそうなるまで黙しなさい、休まない」とおっしゃるからです。今日も一つの訓練を通して、こんな平安な義の実を結ばせて下さった主に感謝します。

ついに、私を主と同じ栄光にあずかせて下さる！
父なる神様は替むべきかな！
(八五・五・五)

命の道は死の陰に

「わたしは主に言う『あなたはわたしの主、あなたのほかにわたしの幸はない』と。……あなたはわたしを陰府に捨ておかれず、あなたの聖者に墓を見させられないからである」

(詩篇一六篇)

波乱の中で、血を吐くようなダビデの叫び！ 深刻な戦い！
神こそ我が岩、我が救い……と黙して神を待つ彼！ 私もまた同じ道を通りました。

人の本性の何と恐ろしいものか、その地獄を見た時、私は「あなたの他に私の幸は無い！」と叫びました。すると、主はご自身を私に下さいました。私と通じて、「さとし」を授けて下さいました。常に共にいますその楽しみ、喜び、平安！私には知りました、主は真実な叫びに必ず答えて下さる事を。そして、命の道はむしろ死の陰にある事を。

もう困難や戦いを恐れませんか。これは私に開かれた奥義です。私個人に呼び掛け、働き掛け、救って、報いを与えて下さった……活ける神は誉むべきかな！

今私は、ここに立っております、主よもし許し給わば、次の一足もあなたのみと呼ばわらせて下さい。

(八五・二・一〇)

真理は時間と共に

「あなたがたの住んでいたエジプトの国の習慣を見習ってはならない。また、わたしがあなたがたを導き入れるカナンの国の習慣を見習ってはならない。また、彼らの定めに歩んではならない。わたしのおきてを行い、わたしの定めを守り、

それに歩まなければならぬ。わたしはあなたがたの神、主である。あなたがたはわたしの定めとわたしのおきてを守らなければならぬ。もし人が、これを行うならば、これによって生きるであろう。わたしは主である。」

(レビ一八・三／五)

馴染みにくいと思っていたレビ記が、実は清さを保つ秘伝の書であると分かりました。その歩みの第一は、「過去（エジプトの習慣）に習わず、将来（カナンの習慣）に習わず、今、主のおきてに従うこと」でした。

一つの問題に当たって、自分がどんなに目が見えない者であるかを知ると、「真理とは何か」との激しい渇きが起こります。神様のみ言葉が真理だと分かっても、反対のように見えるものも多い……しかし、分かりました。神様は活ける方です、（今と言う）時期と共に私に語られるみ言葉が真理であり、いのちの言葉でした。全く従って見ると、神様と通じた証拠が直ぐやって来ました。活ける主が、今通じ、今語っておられる事実……これが唯一の真理でした。私も今、主を呼びます。そして、この生涯のみがあなたに覚えられるものである事を知りました。

主よ、常にあなたと通ずる生涯を送らせて下さい。

因縁からの救い

(八五・一・二〇)

「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生まれたのである」

(ヨハネ一・一二〜一三)

神様からの強い光に照らされる時、暗闇の影が一層濃く感じられる。私が救いにあずかる前がそうでした。そして、今年クリスマスを迎えようとしている今、神様は私の足もとにある暗さを見せられました。ある童話の中に輪廻思想を見て、自分の立場を問われました。「もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう」(マタイ六・二三)と。

しかし、「……一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることとが、人間に定まっている……」(ヘブル九・二七)と、神様は繰り返して「一度だけ」と、おっしゃいました。

「人が命を与えられ、つかわされ、死んで神様の前に立つ……それはすべて一度だけである……生まれ変わったり、動物になったり、石になったりする事は無いのだ……人の一生には前も後も、何も無いのだ……私が初めてであり、終わりで

ある！」私は身分がはっきりしました、前後のもやもやしたものの一切が取り除かれました。十字架は、こんなにも尊い救いの保証でした。私は何とイエス様を知らなかったか、何とイエス様を拒んでいた事か……こんなにも完全な永遠の救い主として受け入れていなかったのです。

こうして、今年のクリスマスは、私にとって新しいものとなりました。私が新しくしようとした訳ではありません。

神様が権(身分)を与え、新しく生まれさせて下さったのです。何倍にも貴い身分とされた事を自覚すると、色々なものが見えて来ました。神様の前に、守るべき一線があると言う事です。私は今、目の前の一步に力を尽くします、一步進むと次が開かれます、今もその一步です。ああ、過去、現在、未来を照らす驚くべき救いの光！ 日毎に呼び掛けられる命の言葉！ 活ける主は替むべきかな！(八四・一二・一六)

私の祈りが無ければ

「アーメンたる者、忠実な、まことの証人、神に造られたものの根源であるかたが、次のように言われる。わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、

熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。……見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。……」

(ヨハネの黙示録三・一四―二二)

ラオデキヤ教会に対して、万物の根源である方から、ご愛の警告と導き！ これは私に対するものでした。「ハッキリせよ」と言われても、どうしたら良いのか分かりません。

しかし、主のノックに対して心の戸を開きました。「私が何とかせねば……」と言う堅い心の戸を開いて、根源者を認め受け入れたのです。するとたちまち変化が起りました。

『祈りについて』「このたぐいは、祈りによらなければ、どうしても追いつくことはできない」(マルコ九・二九)
祈りとは私の熱心、努力ではなく、根源者からの救いの力である事がわかりました。

『愛について』「わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります」(ヨハネ一七・一一) どんなに掻き立てても、自分の内には愛はありません。ただ、上からのご愛(直通、一致、一体化)を受け入れる事が愛でし

た。

根源である方が私の内に満ち満ちて、平安、確信、喜び、力を与えて、ついに主のみ座にまで引き上げて下さる！

お言葉に対して心を開くと、何と驚いた報いがある事だろう！
神様のおん手を動かす生涯に入って、分かった事があります。
それは、私の祈りが無ければ、神様は力を発動する事が出来ないと言う事です。驚いた生涯です、しかし、主のみ旨ですから、戦いつつ、感謝してお仕えます。

どうかあなたのみ旨が行われ、あなたのみ名が崇められますように。
(八四・一一・八)

今、通じ、今、働く

「神はこう言われる、『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救いの日にあなたを助けた』見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」(コリントII六・二)
かつての私は何と神様の恵みを無駄にしていた事だろうか

……何が恵みであるか、どのように注がれているのか、全く分からなかった。そんな私に神様はこう呼び掛けて下さいました。恵みとは、活ける神が、今私と通じて下さる、今働いて下さる……と言う事でした。「押し流されるぞ」(ヘブル

二・一」と警告されて、私は強く心に留めました。すると、神様は私の中に働いて、しるしを与え、力を与え、確証を与えて下さいました。

時は終わりを指して、飛ぶように流れています。永遠を思う思いを与えられながら、それを知り尽くす事が出来ない（伝道の書三・一一）……考えて見れば恐ろしいようです。

一寸先は分かりませんが、大きな事は言えません。そんな私に神様は「あわれみを祈り願え」（マタイ二四・一五―二二）とおっしゃいました。かつては「何と消極的な祈りだろう」と思っていました。今はそう思いません、自分の弱さが分かりましたから。

人に読んで貰おうとして、書く事に苦勞して見ると、神様がどれ程の熱い思いを込めて、この聖書を書かれたらうかと胸が苦しくなります。「有りて有る者」とおっしゃる方の前に、私は今立ちます。

永遠のご支配者よ、私の命をあなたのあわれみの中に置いて下さい、真に弱い者です。しかし、甘えませんが、退きませんが、「受けること」については励みます。激流の中で、このような平安を与えて下さる主は誉むべきかな！（八四・一〇・二一）



洗礼を受けるまで

福岡大濠公園教会 金 生 一 郎

僕がこの教会に来るようになったのは、ちょうど五年前のことでした。それまでは東京に住んでいたのですが、ちょうど福岡に遊びに来た時、父がおぼれてしまったのです。父はビーチボールを取りに行つてなかなか帰って来ませんでした。おかしいなと思いつながら、泳ぎは得意だったと聞いていたので遊んでいると、父がボートで助けられてきました。それから一時間ほどで父は亡くなってしまいました。本当に意外な事でびっくりしましたが、父も母も福岡出身だったので、それから二十日後からは、福岡で暮らすようになりました。福岡に来ると、祖母がこの教会に来ていたので、この大濠公園教会に来るようになりました。昔から教会へ行きなさいとよく言われていたのですが、それまでは一度も教会に行つた経験がなかったので、全くわけもわからずに通っていました。そのためか、今ではその頃のことについては、ほとんど覚えていません。

何週間か来ているうちに、僕は日曜学校に通うようになり

ました。しかし、日曜学校に来て、聖書に線を引き、次の週の朝になって覚えるといったことしかしていませんでした。そして、その金言もすぐに忘れていました。また、教会に来て、何人かの人に「毎週よく来るね」などと言われていい気になっていて、ただ、教会に出席しているということに満足し、またそのことでいい格好をしようとしていました。

高校受験の頃から、僕も家で少しですが、聖書を読んだり、祈ったりしました。しかし、それも本当にたまにしかしないといった感じで、しない日のほうがずっと多くなりました。そして、高校に入学したのですが、僕はたくさんの人達に僕が教会に行っていることを話しました。それは他の人達にも教会に来て欲しいという理由からではなく、ただ教会に行っていることで友達とちょっと違っていることを知って欲しいというつまらない理由からでした。しかし、このことが僕にとって重大な事の一つになりました。

みんなに僕が教会へ行っているということが知られていたのです、ちょうど高校二年の夏休みが終わる頃にもだちが、「『塩狩峠』を読んで、教会に行ってみようかと思うんだけど、どうしたらいい」と相談してくれたのです。

僕は、その友達といろいろ話しているうちに、とても恥ず

かしくなっていました。自分では「教会に行っている」と自慢げに話しながら、実際にはただ「教会に行っている」という肩書きだけを求めて、聖書や教会のことについて何も知らないということに気付いたからです。それで僕は、聖書や教会についていろいろ知りたいと思って、礼拝に出るようになりました。また、いろいろな御言葉を覚えようともしました。しかし、あまり覚えることはできませんでした。こうしているうちに、今年の新年聖会を迎えました。僕は、一度も出たことはなかったのですが、今年は「よし、全部出てやろう」と思って出席しました。そして「何とかして神様を信じよう、何とかして神様を信じるきっかけを見つけ出そう」と思っていました。

ところが、聖会の二日目にこのことを正野さんと話したところ、「あせているんじゃないか」と言われました。言われてはじめてそのことに気付きました。聖書を参考書や問題集のように、御言葉を分解して吟味していくような感じで受けとっていたのです。それで僕は、今年の目標を「御言葉をそのまま受け入れる」ということにして、また、洗礼のことについては、「いつか信じられるようになったら」という様に考えようと思いました。

それから二か月がたった時、また僕は悩み始めました。

それは教会で、「信じられるようになったらではなくて、信じることが大切だ」と言われたからでした。それで僕が信じることができないのは、まず信じるということをしなからじやないかと思って、日曜日礼拝後残って話を聞いてみようと思いました。そして、そのつもりで残ったのですが、昼食を食べて学校のことなどについて話しているうちに話す機会を失って、結局そのまま帰ってしまいました。

僕は、その次の週の月曜日にもう一度話をしに教会へ行きました。「今日こそは絶対に話そう」と思っていたのですが、この日もまた話すことができずに帰ってしまいました。僕は二回とも、こんな様子で話せなかったのもうあきらめようと思いました。

ところが、次の週に青年会があり、そこで見た「逃走」という映画の中で同じような言葉を聞きました。また、家で聖書を読んでいる時に、「わたしに呼び求めよ、そうすればわたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されていることをあなたに示す。(エレミヤ書三十三章三節)」という言葉に出会いました。この御言葉によって、僕はようやく「神様にまかせてしまえばいいのだ」と思えるようにな

りました。そして、早速次の日に教会へ行って、このことを話してバプテスマを受ける決意をしました。

以上が僕のバプテスマを受けるまでの経過です。今、こうして振り返ってみますと、神様が僕を引き戻すためにたくさんの人を通じて、いろいろなわざをなして下さったことを教えられます。神様が友達を通じてきっかけを与えて下さったように、これからは他の人達を引き戻すために神様に僕自身を用いていただけるように、神様に従っていききたいと思っています。

今年の五月二十五日に受洗して、ちょうど三か月が過ぎようとしています。神様を信じて日々過ごしていけることを感謝して、恐れずに進んで行きたいと思っています。



ラ ボ ン

古 野 とみ子

「わたしは、もろもろのたからを喜ぶように、あなたのあかしの道を喜びます。」
(詩篇一一九・一四)

(1)

ある火曜日でした。福岡大濠公園教会で、お昼から集会があると聞かされ、その日は、小田信子ちゃんを連れて、動物園にも行く予定になっていました。お祈りのおかげで、みんな元気に出掛けることになり、まずまずのお天気にも恵まれ、榎本先生と百合子夫人、それに私達(信子ちゃんと石田秀子姉、太田久美姉と私)みんなで六人、朝早く福岡へと向かいました。

私は福岡市の動物園は初めてで、小倉北区にある到津動物園にくらべると、広さ、大きさも、動物達もびっくりする位にスケールが違うのに驚きました。それに、お隣には植物園もあると聞き、そちらの方にもいつか行ってみたいと思いました。

色々な動物がいましたが、その中でも一番印象に残ったのは、なんといっても、初めて見た「アリクイ」でした。あの細い鼻で、アリをすくい取るのだろうか、小屋のすみの方にうずくまる様にしているアリクイを何度も見ました。私が、あまり見ているものだから、アリクイの方もびっくりしたのでしょうか？ すみの方にへばりつきます。その様子がとてもおもしろかったです。

色々な動物を見終ってから、教会へと行きました。久保山キノ姉の作って下さった美味しいお味噌汁と姉妹のお弁当を戴き、お昼を教会の人達とすませてから、集会の時が与えられました。

「わたしたちは福音を恥とはしない。それは、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、すべて信じる者に救いを得させる神の力である。」
(ローマー・一六―一七)

とても恵まれて、帰りの旅となりました。汽車の中で、先生と話がすすみました。私は、動物園でみたアリクイが忘れられず、とうとう榎本先生の顔とアリクイがダブって見える様になりました。先生!!ごめんなさい。(帰宅してから、すぐに書いた文章です。)

(2)

野村先生のお宅と私の家は近所です。姪達二人が、習字や硬筆などを習いに行っていた頃、そして、私が失業中、かな習道を少しばかり習いに行った時、さらにさかのぼれば、亡き父が習っていた関係上、なにかとお世話になりっぱなしです。

先生のお宅には、五月下旬頃になると、それは見事に、神様のみわざをうたい上げる様にさつきが咲きみだれ、わたしたちに楽しみを与えてくれます。

ある日、私は義母の事で先生に聞いて祈っていたく事になり、何う機会が与えられました。先生のお宅にはさつきばかりでなく、先生の書かれた様々な言葉に、いつも心をうばわれ、みとれてしまいます。私は、先生が使われているらしい大小の筆が沢山下がっている棚(?)を見つけました。そこには、見た事もない筆が下がっていました。…馬のしっぽの様な、笹ぼうきの様な、なんとも言葉では、いい表わせない…。そうなんです。

実は、この証を書きたいと祈ったんですが、野村先生だけ、ピンと来るニックネームがないんです。神様が教えて下さらないのは…。私は思いました。こんな事にも、神様は私に

「忍耐!!」を教えて下さるお方である事を。感謝しました。

「主にあつては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである。」
(ペテロ②・三・八)

(3)

高木先生は、いつも証詞の御用をされる時、自分から笑い出されて横道にそれるのも、神様の御旨だと教えてくれるゆかいな先生です。日曜学校でお会いした時、随分と難しい事を生徒達に言われている(私が、生徒ならすぐに手を上げて、質問せめなのに……)。他の集会で会った時も、よく笑われる。なんとなく親しみがわく先生でもある。いつか一度でいいから先生のお宅にお邪魔してなどと、あつかましい祈りをしていたら、その機会が与えられ、奥様の素敵な手料理をよばれて感謝感激した。

「いつも、塩で味つけられた、やさしい言葉を使いなさい」

(コロサイ四・六)

いつだったか、私が塚本敏子姉の家の地図を書いて欲しいと高木先生にお願いした事がある。すると先生は、「一緒に行って上げようか」と言われたが、御迷惑をかけるので辞退した。

高木先生は、私の眼からみると、それはおもしろくうつる先生です。広田寿兄が東京に栄転される時、大粒の涙で泣かれた事がある。そんな先生を神様はあわれんで下さり、広田兄を八幡にすぐ帰された事がある。私は、素直な先生がうらやましかった。なぜなら、私は人前では決して泣き顔を見せた事がない(つっぱっていた)がんこ者である。泣き虫のくせに。

(4)

会社で、私が高ぶった思いで言ったのがもとで、たたかれ行き場のない時、神様が与えてくれた禱吉会。



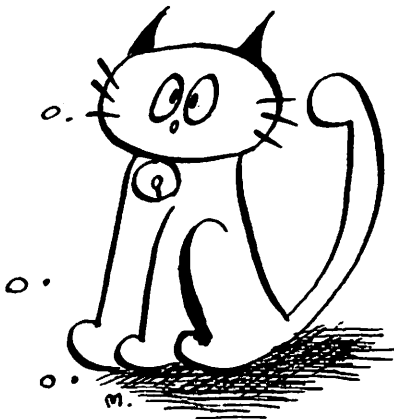
初めは何もわからずに楽しかったが、冗談やバカ話ははずむくせに、神様に祈るとなると、なんとも言葉の出ないダメな私である。お祈りの会がおいねりの会となり、人の目を気にし始め、自分という者がどうしようもない程になって、荷の重い会にいつしかなくなってしまった。そこで、神様に祈れば答えて下さるお方であるのに、——自分の思いにひたって、なかなか飛び出せない、離れない時がある。禱吉会に行かなくなってしまうから、私は家で「おともだちの会」という禱吉会を始めた。初めは、おもしろくってどんどん祈っていたが、だんだん人数がふえたり、祈りの課題が良い課題ではないときざり始めて、近頃はさっぱりしなくなった。でも、又、岩隈姉から教えられた様に、「一人からお祈りさせて下さい」と、心改めて祈る様になり、エルサレムからとみ言葉にもある様に、祈る事の大切さを知った。

伊規須先生には、よく新中原駅で会った。その日は先生お一人だった（いつも素敵な奥様と一緒に多い）。遠くの方に、先生らしき姿が見える。たっぷりとした黒いレインコートを着ていた。その姿が、なんとなくペンギンに似ていた。（いつだったか、ペンギン家族の暑中見舞状を出した事がある——教会の先生の中では、一番よくお便りを出すのも、先

生ですネ！）先生が笑いながら、こちらに來られた。私は、あわてて頭の中の思いを消して挨拶をかわし、汽車を待った。八幡まで十分である。

先生、いつもお便りを読んで下さり、ありがとうございます。又、家族の救いや色々な事でお世話になり、感謝です。いつも、「伊規須先生!!お祈りお願いします」と言って、助けていただいておりますが、テレホン聖書のCMのセーターの図案をねっていた頃から、私もこれからは、使命を全うしたいと祈り始めました。さて……。

神様は、どこに、私をつかわすでしょうか。



せん方つくれども

広田 寿

「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ」

(ヨハネ一四・一)

このみ言は、榎本先生が病床を見舞って下さった時祈っていただき、大きな平安と力が与えられた主のみ言である。

人が生きていく上で、何が一番怖いかという時、地震、雷、火事……等の災難や、飢か、危うきか……等の状態が考えられる。しかし、それらの外部からの出来事もさることながら、内なる心が定まらない——心騒ぐ状況は、逃げ場のない怖さがある。近年、中高年の自殺が増加していると言われている、病いや、経済的な背景もあると思うけれども、孤独感や不安から、追いつめられる結果ではなからうか。

この度の病気で長らく休むことになったが、神様のあわれみと、牧師先生はじめ教会の皆さんが心を合わせて祈って下さった熱い祈りに支えられ、全き平安と、具体的な癒しが与えられて、今一度、十字架の救いとよみがえって共にいて下さった主に心から感謝を捧げることができた。

「おじいちゃん、お誕生日オメデトウ」、三才になった孫の差し出すかわいい花束を受け、五十代最後の誕生日をベッドで迎えた。明日はいよいよ手術を受けるという前日であり、その準備と検査のため忙しい誕生日であった。食事療法で治る筈が、三週間余りたっても思わしくなく、転院して手術をすることにってしまった。回り道であったような気もしたが、大切な備えの時間が与えられたと思う。以下、思い出すままに経過を辿りながら感謝したい。

手術に入る時も、麻酔から覚めた時も、神に信頼して一切をみ手にゆだねていた。見ゆるところの様は、せん方尽きる思いの状況であって、胃の大部分を切除した手術は三時間半もかかり、集中治療室で一夜を過ごしてベッドに帰った時は、鼻から管が通されて胃の中の液を一定時間に注射器で吸い出し、のどにタンがからんでも管がつかえて咳に力が入らない状態。おなかはミゾおちからタテに二十糎余り開いて拾数針も縫い合わされ、右脇腹にはドレンパイプが挿入されていて、おなかにたまる液をガーゼと紙おむつを当てて吸い取り、漏れる度に取替え、深夜にまで及んだ。腕には点滴の針が挿し込まれ、五百CC四本と二百CCの化膿止めが二本、一日がかりで注入され、背中には、脊椎に管が入れられていて痛み止め

が注入される。排尿は管によりベッドの下に集めて計量される。全く、体中身動きならないような状態でありながら、癒着を防ぐため一時間おきに寝返りを打て、肺炎にならぬようタンは必ず出し、一時間毎に十回くらい深呼吸せよ、と厳しい。術後は微熱が続き、脂汗がにじんで寝巻きは何回も取替えねばならなかった。

こうした中で、かたく寄り頼んで、全てをおまかせする方がいて下さることの幸いをしみじみ感謝した。そして医師はじめ、看護婦さんの献身的な手当に、また、毎朝掃除に来てくれるおばさんにも、新聞を届けてくれる人にも感謝した。ベッドから眺める世界は、砂にへバリついて上を見ているカレイやヒラメに似て、立っている時と視野が異なり、凡てのことに喜びと感謝が大きかった。

牧師先生が見舞って下さった時、窓の外を眺めながら「絵になるような景色だ」と教えていただき、天井ばかり眺めがちな病床で、見晴らしの良い四階の窓から外に目を向けることができて感謝した。昼間、たくさんの人が出入りしていたと思っていると、夜中に走り回る音で目覚め、翌朝には空室になっているといった一見、檻の中のような殺風景な病棟にあって、モンマルトルの丘に似た風景をダブらせながら、く

る朝毎に、そして夕に、また桜の蕾がふくらむ頃から、葉桜へと移り変わる自然をめでつつ「病いの床にも慰めあり」、「ここも神のみ国なれば」と讃美せずには居れない感謝を味わうことができたのである。

全身に管がさされたような重装備で、三日目から歩き、一週間で抜糸、目に見えて順調に回復へ導いていただいた。五日間の絶食が過ぎて、のどをうるおしたお湯のおいしかったこと、生まれ変わった胃の中に、はじめて重湯をスプーンで流し込んだ時の異様な感触、空っぽのおなかにモグラが入り込んでいき、腸の中をかき分けるような痛みを覚えた。おなかがグルグル鳴る、ガスがたまる、ゲップが出る、一日に六回に分けて少しずつ食べる訓練が続いた。今まで、好きな時に余り意識せずに、何でも放り込んでいた胃袋にメスが入れられてみて、はじめて神様の創られた臓器の精巧さに、今更のように目を瞠る思いであった。食べることにこんなにも思う程な苦勞に思い知らされたのである。なお、胃袋が小さくなっても機能させて下さることに対し、一口一口噛みしめる度に感謝せずにはいられなくなった。

十二日目に入浴が許され、おなかのキズと、伸び切らない腰をかばいながら湯ぶねに入った。すっかり掴まっているの

に、なんと、おなかから先にポツカリと浮いてしまつて止めることができなかった。元々、スリムであったのが数キロもやせて、我ながら見るに耐えない。飢餓地帯をゆくに似た姿に、大きな手術であったことを覚えさせられ、今、生かされていることの素晴らしさに、胸がこみあげてきて、裸のままに神に感謝した。

主に在る望みによつて気力は充実、ベッドの上でも割合い元気な声が出た。しかし、ベッドから起き出し、立つてみてはじめて踏ん張りがきかない体力の衰えを覚え、退院して直ぐに出家したいという私に、一ヶ月は駄目だと制せられた医師の言葉に従わざるを得なかった。三週間で無事退院、あと一ヶ月通院治療となり、自宅で食事療法を続けながら体力の回復に努めた。

三ヶ月余りたった今日、足にも力が入るようになったが、体重は少しも回復しない。しかし、日々新しく生かされている感謝の中にあつて、神様が胃袋の大きさに合わせて体重もコントロールして下さると考えるようになった。全く予期せぬ病いを通し、主の大きな恵みに感謝すると共に今よりのち、主がみこころをなして下さるので、どんな事態が起ころうとも、現実を、気負わず、開き直ることをせず、ありの

ままの姿で受入れることを教えられた。勿論私には、ガツチリ受止める力はない。そのままを主におゆだねして、心を騒がせない歩みを続けさせて頂きたいと願っている。

わが行くみちいついかに なるべきかはつゆ知らねど

主はみこころなし給わん……アーメン。

(六〇・六・二三・信徒会にて)



御霊に導かれて

大田 邦子

「貴方こそ生ける神の子キリストです」

(マタイ一六・一六)

主は、今も生きて働いていて下さることを如実に知らせていただきました。

私は早くに両親を亡くし、その後、兄が親代わりとなって面倒を見てくれました。その兄が昨年六月、天国に召されました。兄嫁のT姉にはさまざまなことでも長い間絶交されました。この度の兄の最後を迎えることになりました。この神様の長い年月かけてのご計画に、主の尽きない恵みと豊かなあわれみを感じせずにはおられません。

私は昭和十八年結婚（主人は兄と同級生）、間もなく兄も結婚しました。そのT姉はあまり健康な身体でなく、そのうえ片方の視力が弱く、肉体的には恵まれていませんが、非常に性格の強い協調性を持たない人で、霊的な事にはすごく興味と言いますか、関心をもって反応します。

そのT姉と私は嫁と小姑の関係で、犬猿の仲どころか、憎し

みと誤解でことごとくに反発されました。私がクリスチャンであることも憎い一因でした。

兄の結婚もスタートは良かったのですが、しばらく後、友人に当たった結婚通知書の内容（姉のことを記し、憐れな彼女を助けてやる様な文面）から端を発し、自分の伴侶となる者を憐れむとは何事ぞと憤慨、兄さんは表面優しく良い人を通っているけれど、ごう慢、その内には汚いものが一杯、真実の一かけらも無い、命と命の闘いでもある……等と言って、トラブルの絶え間が無く、二人の子供も常に巻き込まれ本当に可哀相でした。又、私の存在も大きな要因の一つでした。T姉は結婚は復讐の手段だとも言いました。又、最近は一ツ屋根の下に居ても家内離婚の状態だった様です。私達には考えられないことばかりです。

この様な葛藤の繰り返しの中で、T姉の健康状態は悪化、目も次第に視力を失い、現在は失明の状態、娘、息子も離れて行くし、T姉自身も苦しく、何とかして救われたい一心で、生長の家、キリスト教、創価学会等をかじって見るものの、信じられない、霊の平安が得られないと……そして、”私はキリスト教の様な力の無い概念的な宗教では救われぬ”と悉く私には敵対し、長姉の信ずる生長の家は宗教泥棒で、外

の宗教の良い所をとっているだけ、と結局、現象のはっきり現れる強烈なこの凄惨な宗教でないとは救われぬの“と言つて創価学会に入信しました。

その結果、私を折状しようと、それは熱心に私を東京に呼んでくれたり、手紙やテープを送つて来ました。それに応じない私が又憎く、二重人格で恩知らず等と激しくののしり、兄と付き合うのは勝手と言つて、幾度となく絶交状態が繰り返されました。私は、ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しい裁きをする方に一切をゆだね、耐えて来ました。

泣き虫で弱虫だった私に、この強いT姉が与えられましたことは、私を愛するが故の、神様のご計画で、私には大きなお恵みでした。この姉が居なかつたら私の信仰がここまで続いたかどうか、又切に主を求めることが出来たかどうか疑問です。本心に心の目を開かせて貰いました。

「わたしは自分のあわれもうとする者をあわれみ、いつくしもうとする者をいつくしむ。ゆえにこれは人間の意志や努力によるものでなく、ただ神のあわれみによるのである」
(ローマ九・一五―一六)

十三年前、絶交のT姉から、突然兄が膀胱のポリープを切除する為入院するので、手伝いに来て欲しいとの知らせに駆け付けました。悪性腫瘍とのことで、がく然としました。

主治医は今本人にも知らせない方が良いとのことで、T姉も大変体が弱っていたので、真実を言わずに帰ってきました。後日それがわかり、兄さんがもし死ぬ様なことがあったら、その時は知らせてあげるからと言つて、又々絶交と言ふことになりました。その後、私は自分のおかれた立場を考え、T姉のことも思い、一切兄とも年賀状位で、姪、甥とも交わりをしないで黙つて耐えて来ました。でも兄からの一年に一度位用事を兼ねた電話で様子を知ることが出来ました。

ところが、五十九年十一月京都におります姉から、兄の重病を慌てた声で電話して来ました。それも思いがけない五十年余り音信の無かつた人から……。兄が出血多量で、防衛医大に救急車で運ばれ、輸血などして重体との知らせがあつたとの事でした。(兄はその頃埼玉県に単身赴任、週二日帰宅の生活)胸騒ぎがしました。兄は一人だったのだろうか？…頭を様々な思いが駆け巡り一夜眠れませんでした。T姉の健康状態も気にかかります。甥は？ 姪はアメリカに在住、日本での生活は三分の一位、今どうしているだろうか？ まず、

祈りました。

「汝ら心を騒がすな 神を信じ 又我を信じなさい」

(ヨハネ一四・一)

T姉とは絶交状態なので尋ねることも出来ず、防衛医大に手紙を書きました。兄から病院より電話がありびっくり、苦しそうな息づかいの話し方で、ここに至るまでの病気の経過と心境を簡単に話し、看病に来るに及ばない、大丈夫と言って来ました。思っていたより落ち着き、電話に出られる位になったのならと、僅かに愁眉を開きました。エス様に感謝しました。

すぐに種子島の主人に電話すると、主人は心配し、病院ならいいだろうから二人で様子を見に行こうと言ってくれましたが、私達が変に動くとT姉が又どの様に、兄や私に当たるか判らないのと、折角これまで耐えて来た事が無になるのではないかと思ひ、時を待つことにし、切に祈りました。

それから幾日か経ちました。兄から電話がありました。もうその時は息も絶え絶え、間をおいての話し方、防衛医大を退院、今自宅療養になり、家の近くからの電話で用事が頼みかかったので電話したと……、もう骨盤がやられ、痛みもあり、歩き辛く、やっとここまで来た……、来年七十歳の

自分の誕生日一月十七日位までは何とか電話が出来ると思うから……と、やっと話し終えた感じでした。もう胸が締め付けられる思い、受話器を置くとすぐにでも飛んで行ってやりたい……、祈り今一度……「恐れることはない わたしが共にいる」と、み言に支えられ、立たしめていただきました。

でもやはり何かしたい、時間がもう無い、どうにか出来ないものだろうか、頭の中でこれらの事が堂々巡りする。その頃、榎本先生もご退院間もない頃でしたが、思い切ってご相談に伺うことにしました。先生のすっかりお元氣になられたお姿、お顔もすっきりと、心から主に感謝しますと共にホッとしました。

先生は「肉の思いでなく、主のみ旨はどこにあるか……、兄の病氣も又この様な中をお通しになるのも、兄に大きな使命を与えていらっしやると思うから、時間、空間すべてを越えて、間髪容れず救いの手をのべて下さる主のみ手に、すべてをお委ねして祈りましょう」と、そして最後に「神様にお委ねしたら、決して業を行われるみ手より引き戻してはいけませんよ」と確信のある一言をつけ加えられ、私に念を押されました。私もこの地上での兄の生死は問題で無くなりました。

「あなたがたは恐れてはならない、固く立って主がきょうあなたがたの為にさる救いを見なさい」

(出エジプト一四・一三)

主のみ旨にお従いしようと肉の思いを捨て、軌道修正しました。

ここしばらく暗雲に閉ざされていた気持もすっかり晴れ、平安が与えられました。ここで大切なことを教わり、大きなお恵みをいただきました。私は目の前の状態に取り乱し、主から目がそれてしまいました。

「肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思うからである。肉の思いは死であるが、霊の思いはいのちと平安である」

(ローマ八・五―六)

ここではつきりと、肉では冷酷に思える程、霊にお従いする毅然とした姿勢の榎本先生と、肉に従う小さな惨めな自分が示されました。

「肉にある者は、神を喜ばせることができない」

(ローマ八・八)

悔い改めました。すべて主にお委ねし、心おきなく種子島通いを始めました。

年が明け、新年聖会で今一度、自分が何者であるか……罪

許され神の子と尊い身分に変えて下さった……だから、どんな歩みをすべきか、聖書を読むことが神様との交わりであり、み霊に満たされることが第一、み言に完全に従いなさい、み霊が歩かせて下さる、即ち神の子であると、原点に立返らせせていただき、一年の目標を定めて下さいました。昨年末、兄のことで失敗、道を誤るところだっただけに、肝に銘じ、本心に主に信頼して行こうと心に決めました。兄の病気が気がかりの日々でしたが、一月十三日の礼拝で、

「この幻はなお定められたときを待ち、終わりをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそれれば待つておれ。それは必ず臨む、滞りはしない」

(ハバクク二・三)

時がくれば必ず成就して下さるから、主を待ち望みなさいと、整えていただきました。

それから種子島でしばらくの時を過ごしましたが、風邪を引き、主人が止めるのも聞かず、二十三日帰宅しました。

ところが、翌二十四日出先に、一美から涙声で、兄が癌の末期で重体との知らせが、T姉よりあった旨連絡が入りました。この知らせを受けた瞬間、ああ、肉の思いで姑息な手段に出なくてよかった。榎本先生の何時、如何なる時にも、主のみ

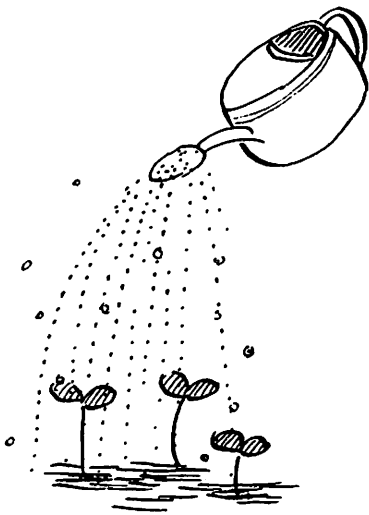
旨は如何に……“ときちんと主を前に置いてのお導き、今判らないが、後これ知るべし、主に深く感謝しました。T姉が、十年程前に絶交を言つて来た折、”兄さんの死が迫った時には知らせてあげるから……“のいやな言葉が脳裏をよぎりましたが、恐れるな私はあなたと共に居る、と力強く迫っていただきました。取るものも取り敢えず翌日、京都の姉を誘い上京、相模原の家に駆け付けました。

十三年振りに会ったT姉、会うなり堰を切った様に時間の経つのも忘れて話し始め、病氣に対する考え方も……、自分達夫婦は凄く宿業を持ち、汚いものを持っている、少々の試練では駄目なので、癌という苦しまなければいけない病をもつて、本当の人間の姿、素直な命に立ち返らせようとして下さっている。自分の眼も同じで宿業が切れた時、必ず見える様にして下さるし、兄の病氣も良くなるから、ご本尊を信じて、すぐ行くと……。そして、私に代わって看病して欲しいと頼まれました。

伊豆下田より駆け付けた甥にも会え、考えても見なかったT姉、甥、姉、私と四人（姪は在米中）で、気がかりの中にも、和やかな雰囲気の中で、夕食を囲みました。その時甥は、かみしめる様にこの様な家族的な雰囲気を味わうのは生まれ

て初めてと……。私は思わず胸が熱くなりました。”良かった、本当に良かった“そして皆で助け合つて兄の看病に当たる事を話し合いました。思つてもいなかった形で、兄の看病が出来るとは……。確かに主は生きていらっしゃる。六十年のメッセージ、万物をみ心のままに変えうるお方が如実に業をなして下さいました。

早速、姉と一緒に不安な気持ちで北里大学病院に入院中の兄を見舞いました。十年振り位に会います兄はすっかりやつれ、私達の突然の見舞いに驚くより、開口一番”千代子がおれの葬式の手伝いの為に呼んだのだろう……“と。身も心も



すさみ、落ち込んで居ました。訪れた私達もとっさに言葉が出ず、「千代子姉さんも柔らかく変わって、私達に看病を頼んで来たの」がやっと、ただただ悲しみを悟られまいと一生懸命でした。

間に合って良かった。まず何をしたら良いか、主治医に症状をお尋ねしました。はっきりと死の宣告、今兄に必要なのは、医学で無く、家族の愛情ですと。それに加えて婦長さんが言われるのには、本人も自分の状態を知ってか、死期を教えてくれと執ように尋ね、こまごまと神経を使っているので自殺の恐れがあるから、病人に気づかれぬ様に、ナイフ、ハサミ等、危険なものを持ち帰って下さいと。あとは何を言われたか覚えぬ位、頭をハンマーで殴られた様な衝撃に、涙をこらえ、平静を保つのが精一杯でした。

最後に「今は家族の方の温かい看護が一番です、そして食事一口でも喉に通れば、又元氣を取り戻されるでしょう。どうか生きる氣力をもたせてあげて下さい。私達も出来るだけの便宜は計りますから、宜しくお願いします」と逆に頭を下げられ、感謝しました。

それから毎日、味気無い病院食に代わって、何とか食べさせたいと知恵をしぼり食事作りに励み、病院通いが始まりま

した。T姉も私の帰るのを待ち構えた様に兄の病状を尋ね、喜んでくれます。

京都の姉も帰り、甥も仕事に戻り、いよいよ私が軸となって動くことになり、T姉と私二人だけの生活が始まりました。病床の兄も、甥も在米の姪もT姉と私が生活を共にして病院通いするのは絶対無理、三日と持たないだろうから、赤坂にあるマンションを使う様にと、地図と鍵を渡してくれました。(T姉は前にも述べました様に、自己の強い人で健康にも恵まれないので、家政婦さんと、ただ僅かの友人としか、お付き合いしていません)でも、私は大丈夫、「神はわれらの避所また力なり」とおっしゃって下さっているから、難しいT姉や、人を意識するので無く、ここ迄道を開きこの所に送って下さった主を前に置き、常に問いかけ、今という時、主が何を求め、何をさせようとしていらっしゃるのか、主のみ声に耳を傾けて真剣に歩ませていただこうと、心に決めて歩み出しました。

二、三日は兄の状態もひどく、どうなることかと案じられました。主は祈りに応えて、兄も日増しに明るさを取り戻し、食事の注文も出はじめ、婦長さん達も大変喜んで下さいましたが、それにも増して、驚くことが起こりました。

主は、T姉の気持ちを変えて下さったのです。これまでT姉は、兄の過去や亡くなった両親、私達姉妹の批判ばかりでしたが、思いがけない言葉をT姉の口から聞く様になりました。

。今までは、あなたが憎くて仕方がなかったけれど、今は素直な気持ちで私を呼ぶ気持ちになれた。

。今まで一度だって兄を憐れむ気持ちになれなかったけれど、「私の命に代えてでも主人を助けて下さい」とご本尊様にお願ひしたと……。

私は主に感謝しました。T姉と一緒に生活した約一ヶ月間、やはり些細なことから色々とトラブルはありましたが、このトラブルがかえって、私にも口を開く時を与え、お互いの心を開く機会とならして下さいました。

そして、T姉が言うには、

。今度の最初の出会いで、誤解が八十％解け、このトラブルがきっかけで残りの二十％が解けた。

。あなたは命の弱いところがあるけど、兄弟の中で一番心がきれいなね。

。私の知っているキリスト教と、あなたのキリスト教とは違う、と。

私……私達は聖書にもとずいて歩むだけ、教えではなく、救いなものだから、福音と言うの。

姉……いい信仰に入ったわね、と。

。兄や子供達は一番大切な霊のことを疎かにして、ただ目に見えるものだけを追っている。これ迄は、自分が中心になって、やって来たから（人間は自己確立無くしては駄目……これがT姉の持論）破壊寸前の家族を何とか食い止めることが出来た。でも皆、私から離れて行く。もうくたびれた、手に負えなくなったから、これからは大田さんや邦子さんに、兄さんや子供の心のことを頼むと。

目に見える状態はどうあろうと、人の心をも動かして下さいました。この様な交わりを重ねている中、T姉と信頼感も深まり、心を合わせて表裏一体となって、兄の看病に当たることが出来ました。辛い厳しい中でしたが、主が共に居て、見えない方を見えるが如くに「大丈夫だよ」と声をかけ、すべての事に届いて支え導き、驚く結果をも見せて下さり、今は恵みの時と主を讚美しつつ、感謝の日々でした。

「来て 主のみわざを見よ 主は驚くべきことを地で行われん」
(詩四六・五)

兄にも氣力を与えていただき、点滴や他の管もとれ、これがベッドで死を待つ人なんだろうか、全く無かった食欲も元氣な時、好んで食べたお店の鯉のあらい、鰻のかば焼きを一人前食べる位迄に回復させていただきました。こうなっていると、家族としては、坐して見るに忍びず、

奇跡が起こってくれるのでは……

まだ何か出来ることがあるのでは……と。

癌治療のニュースがあると、外国にまで手をのばして調べることでした。人の作った医薬に頼るのもいいけど、私はまず、目に見えるものを追うので無く、エス様を知らない兄に何とか永遠の命を与えていただき、主にあっての望みを持たせたい。勿論、姪、甥にも……その願いで一杯でした。朝に夕に、切に祈りました。

家族の中で、色々と意見がありました。話し合いの結果、最後の手段として、自然療法（自然食、太陽熱、温床療法、ビタミンC等……）を取り入れている大阪柏原にある病院に転院治療することとなりました。動かすにも体力に限界があるので、一番短時間に移動出来るヘリコプターで二月二十一日に空路大阪へ転院しました。アメリカから姪も帰って来ましたので、皆で交替して付き添うこととなり、私もそれから

は大阪に、種子島にと目まぐるしい日々が続きました。

それから三ヶ月あまり、病院での懸命の治療にもかかわらず、兄は回復を見ること無く、ついに六月二日、地上での総ての使命を終え、主は兄を天国に召して下さいました。

最後の時には、私が看病に行っておりました。その折、しみじみと“有難う、邦子が来てくれると、気持ちが悪く着き安らぐ”と幾度も言います。これも五年前、母の癌との闘いを看護した体験がここで生かされたのだと、主に感謝しました。

意識が無くなった夜半、兄のうめく様な声に起こされ、一時間程身体をさすったり、水を飲ませたりしてましたら、頭をもたげ、しばらく辺りを見回し、何か話したげに……私の顔をじっと見つめます。もう夜も更けましたから“休もうね”と一番柔な姿勢にしてそっと布団をかけなおし、私もベッドに入りました。

朝、目を覚ました時、もう兄の意識は無く、この世の一切の苦痛から解放され、五日後の召天となりました。

T姉も電話で“邦子さん本当によくやってくれて有難う、あなたが居てくれて心強かった、兄さんもあなたが来るのを待ってたのよ”と素直に感謝してくれました。

さまざまな思いで胸の痛み、感無量のものがありました。約半年間の秩序正しい、思うところ、願うところに優る、主のみ業を仰ぎ望み心から感謝しました。

榎本先生はじめ皆様の熱いお祈り、ただただ、感謝で一杯です。有難うございました。

T姉と私の出会いから、約四十年が経ようとしています。さまざまな出来事を通し、十字架のみ救い、愛の信仰がどんなに素晴らしいものであるか、兄を見てしみじみ感じました。私共は、永遠の命につながらせていただき、信仰によって望みのないところにも、なお望みを持たせていただける主の豊かなあわれみを感じました。

榎本先生がよくお話し下さいます。主を手ざわる様に、又見えない方をあたかも見ている様に肌で知りましょうと。私は先生のお導きで、尊い体験をさせていただきました。み霊に導かれて歩む時、肉では考えられない神様らしい、動かす事の出来ない事実をもって、主を知らしめて下さいました。又、T姉の信仰の姿を見て、まず宿業を切ろうと命をかけて懸命に励んでいます。己の熱心にするからでしょうか、身体も疲れますし、人を裁くことになり、許しの無いことが……、十字架の救いにあずかった私には、たまらない思いです。

どうか今もT姉一家が、我々の神に帰れ、主は豊かにゆるしをあたえられる“と主がおっしゃって下さるのですから、立ち返って永遠の命を得て、心安らかな日々が与えられます様に、切に祈る毎日です。

私はこの度のことを通し、主からこんなに愛されているんだという自覚を持たしていただきました。このご愛にお応え出来る様、み霊に導かれ、助けられ、主の喜び給う道を歩んで行きたい願いで一杯です。

「汝我に呼び求めよ 我汝に応えん 汝の知らざる大いなることと隠れたることを 汝に示さん」

(追記 昨年九月に主人が兄の追悼文を作りテープにとって送りましたところ、これが姉の気に障り、大田さんを見損なった、軽薄だ、邦子さんのとは良く話しが合ったけれど、やはり観念的な信仰だった……と言われ、又絶交の状態が始まりました。)

沈丁花

野口米子

名のみの春の中、猫のひたいほどの裏の土地に、今年も沈丁花が濃紅色の固い蕾をつけた。表の庭には出してもらえない身分をわきまえ、やがて花開き、蕾の中の白い可愛らしいかたまりを見せることだろう。

この花を見る度に、大阪にいた当時の社宅のベランダを想い出す。

庭のないコンクリートの三階の一角、せめて青い物をと土運び、木箱や大きな植木鉢にいろいろな植物を育てた。

ある年の夏に、どだい大きなひまわりの花が咲いて、娘達と一緒に歓喜した。

サボテン、万年青、観葉植物、名前は昔のことと忘れてしまったが、その中に沈丁花の鉢もあった。

近くの田んぼの土をもらって来たせい、肥料が良く利いて、みるみる内に大きく成長して毎年花を咲かせ、さわやかな香りを振りまいてくれた。

それは母が、大阪に遊びに来た時、たまたま散歩に行った帰

りに近くの民家からもらって来てくれ、さし木をしてくれたものだ。

母も花好きで、よく草花や花木を狭い庭に植えて、子供達に私達にきれいな花を見せてくれたのを想い出す。

それはともあれ、母が逝ってポツカリ胸の中に空白が出来て、母が生きている間に、ああすれば良かった、こうすれば良かったと母に対する詫の念が、じんわりとわいて来て、幼ない頃から知っていた懐かしい沈丁花の香りに、涙する日々であった。

ある日、私は大きな植木鉢の沈丁花の木を土ごと抜き取り、その植木鉢の残りの土の中に私の大切な物をそっと入れ、その上に根のついた沈丁花の木を植えた。私の大切なもの、それは小さな小さなダイヤのついた金の指輪である。

それを鉢の中に埋めたとしても何と言う事もないけど、せめて親不孝した自分に対する慰めと指輪の一つもしたこともない母に対する思いが、そんな行為をさせたのかも知れない。母はもう居ないけど、今は天国で気楽に過ごしているに違いないと思う。

何故なら、生前、一言「私もキリストに行ってみようか」と、はっきり言ったことがあったからだ。

この世では人の事ばかり思い、自分を犠牲にしてまでも人のためにし、又小さな事ばかり気にする母だったけど、今はもうわずかな心配事もなく、にこにこしてイエス様と話している事だろう。

あの指輪は、今は私の左のくすり指に光っているが、この世の金銀宝石に比べる事の出来ないきらめきの中で、そして水晶の様に光る天の川のそばで、母はのんびりと昼寝をしているに違いない。

(昭和五十六年記す)



耐ええぬ悩みはなし

K & K

母が癌という宣告を受けたのが、今から三年前、医者の話ではあと三年……。

その時、十数年離れて忘れていたイエス様の事を思い出し、聖書を棒読みする毎日でした。お祈りしたくても、お祈りできずに、「神様助けて下さい」とつぶやいていました。

その後、離婚という私にとって一大事が起こり、教会へ行きたい、何とか今の自分を助けてほしいと願い、勇気を出して教会の戸を開けました。

多少の違和感はありましたが、だんだん聖書が読めるようになり、お祈りできるようになりました。

自分の考えているように見通しがつけば……と思いつつながら通っていましたが、状態はかえって悪くなるばかりでした。

それから約一年位過ぎた頃、礼拝での御言「まず神の国と神の義とを求めなさい」(マタイ六・三三)が心にとまりました。今まではまず私の願いで、終りが私の願い、真ん中はんの少し神様の事でした。全々変化なしでしたので、この御

言のようにと願って聖書を読むと、窮屈だったのがウソのように安らかになりました。

八月に母が二度目の入院、医者からも「もう生きては帰れません」と言われました。

このままでは死を待つばかりと思い、あれこれ考えて随分苦しみました。(病院を変えたら、もっと良い医者に診てほしい等々)

ある日、母の入院していた三階のベランダからぼんやり外を眺めていたら、帆柱山のふもとに鳥が二羽飛んでいるのが見えました。その朝の集会では、「恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である」(ルカ二・七)という御言だったなあ……とか思っていました。

その時、そうでした、末期癌なのに痛みが全く無く、家から近い病院を与えられ、又こうなる前に教会へ導かれた事、あらゆる面で、主の最善を信じさせていただきましたと心から信じて疑わなくなりました。

母が入院してからは、お祈りも真剣になり、わずかな時間も聖書を読みました。讚美歌二九八番「やすかれわがこころよ」と絶望状態の中でも、主は共にいて下さると祈りをこめて唱っていました。

何度も榎本先生に相談に行き、御言を与えられ、励まされ、お祈りに支えられてきました。

ある時、「私は駄目人間です。こんな駄目人間がクリスチャンで恥ずかしい」と言って先生のもとへ行きましたら、「駄目だからクリスチャン、それだからクリスチャン。Kさん今まで自分で良いと思っていましたか？ 神様は、もっと駄目だと知っていてあえて選んで下さった。心配しないでいいですよ」と言ってくれました。(このことでは今も助けられています。)



「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたくしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マルコ二・一七)

母の状態も思わしくなく、父の異性問題、そして交通事故、さらには父の会社の経営不振、職場の人間関係などなど、世の中で一番不幸な人の顔をして重い足どりで教会へ行きました。

「今が一番恵まれている時ですよ。」と榎本先生が言われて、ボンと教会誌「ぶどうの木」をくださいました。

心の中で、榎本先生は御自分がいつも祝福されているから、私の気持ちなんてわかってくれない、どうして今が一番恵まれている時よ……と思っていました。それでも、お祈りしていただき、なんとなく軽い足どりで家に帰りました。

その「ぶどうの木」には、先生のお子様がお召された時の事が載っていました。さっき心の中で思った事を取り消しますと何度も言いました。

十二月七日、母が召されました。

入院してから神様に整えていただき、わかっていた事でしたが、どうしようもない悲しみでした。

言葉もなく榎本先生にお電話すると、いつもの元気なお声

で、「Kさん、今までお母さんの御用をさせていただいて感謝ですね。お母さんのことはもう神様におまかせして、これからは、子供の御用をさせていただきなさい。……この時、まとわりつく子供をふと見ると、忙しい時、ヒステリー起こしながら叱っていたYが『まあ、こんなに可愛かったのねえ』と思いました。

つらい日でした。人から慰めの言葉をかけられると、よい悲しみが増すばかりでした。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」(ヨハネ十四・一)

それからほんの二・三日たった時でした。

『私はあんなに母のためにしてあげた。Sちゃんは遠いから仕方ないけど、Yちゃんは長女なのに、私ほどしなかったから、母が死ぬ時、私の手を握って離さなかったのだ。父の世話も私に押しつけて……。もっと私を大切にしてください。母の物は私の物。』と欲だけの私がそこに居ました。

私の心の中で思っている事が、態度に現われるのでしよう、自然に姉と気ますぐくなり、些細な事に「ムッ」とする日が一日過ぎました。

これではだめ……と思いつながら、祈れども、むなししいもので

した。

なにげなく榎本先生のカセットを入れてみると、「わざわざいなるかな、わたしは滅びるばかりだ」（イザヤ六・五）わざわざ人は人だと思っていたけど、本当は自分だということに気がついていないということでした。聞き終わった時、悪いのは姉でも父でもなく、私でしたとわからせていただきました。

母の死を目の前に見て、物に頼っていてもだめだとわかっていたつもりでしたが、ほんの一瞬のうちに心を奪われていたのです。

親不幸な私に、神様は最後の看病をさせてくださったのです。死ぬとわかって入院してからは、あまり言わなかったものの、家ではブスブス言っていた事も神様は全て御存知だったのです。させていただいたが、してやったに変わって……本当に申し訳ない限りでした。

悲しみと恐れ（私はおばけが恐いのです）の中で、クリスマスキャロルに参加させていただき、全てを忘れて嬉しい一日でした。

父は暮れから家を留守にしているので、子供と二人で迎える新年を思い、寂しさの余り母の写真の前で大泣きしました。

「一緒に死ねば良かった。私のことわかってくれた、一番愛してくれたお母さん」。

心配して側で子供が「おかあん。おばあちゃん？」（おかあさんおばあちゃんのこと）と言って顔をのぞき込んで来ます。

「おばあちゃんしんどよ。（上を指さして）うえ、てんごくいったとよ。えったまんとこ（イエス様の所）」。

母親である事を忘れて、私が悲しい、つらい、その事ばかり考えていました。

「エス様にお祈りしようね」。

「うん。エッたま」。

お正月の三日目の夜、この世で一番愛してくれた母を失ったけど、この母より、もっと大きな愛で私を愛してくださる主がおられることを、はっきりと知らされました。

「わたしは限りない愛をもってあなたを愛している。それゆえ、絶えず真実を尽くしてきた」（エレミヤ三一・三）

母が亡くなってもうすぐ三ヶ月。

榎本先生がおっしゃられた「今が一番恵まれている時」が今になってわかります。

いつも主を前にしているほか、望みがもてない、主から絶

対目を離すことができなかつたあの頃。今でも何かの時、すぐ思い出すのは当時与えられた御言です。

母の横で、心の動揺の余り祈る事さえ出来なかつた時、ささやくような声で歌った讚美歌を、今も姉とよく唱います。

自分が何ひとつできない、主に頼るほかないとひとつひとつの中で教えられました。

自分の事情さえ良くなれば……と思つて近づいた教会でしたが、ほかの物では得られないイエス様の平安を与えられ、感謝しています。

早くこの中から抜け出したい、どうにかならぬのかと思つて過ごしていた毎日が、今私の心の中で一番大切な重みのある思い出です。(お祈りありがとうございました。)

「我、弱きときに強ければなり」(コリント②十二・十)



「聖書と科学について」

(一九八六・五・八 創造科学研究会
福岡におけるギッシュ博士との質疑)

伊規須 太郎

【質疑の前行われた講演の演題】

※「揺れる現代の進化論」

【伊規須よりギッシュ博士に対する質問】

私は明確に聖書の真理に従って生きている伝道者でありませんが、こう言う立場から幾つかお尋ねをしたいと思えます。まず、

▲総てのものが崩壊に向かっていると言われましたが、生物が固体を再生産して行く事はどう考えたらよいのでしょうか。

【ギッシュ博士】

△生きている細胞、また生物が再生出来ると言う理由は、人間で言えばその受精卵が、既にその中に総ての遺伝的なデータを含んでおり、遺伝的なものだけではなく、機械的な構造上のデータを総て含んでおり、繁殖するための機会が揃っているからであります。親がいる限り、赤ん坊が出来る事には問題無いと思えます。進化論者が言っている事は、これだけ

複雑なものが、親無く生まれたと言うことを言っているのがあります。ですから、受精卵がちゃんとした生物になって行く繁殖と言うものは、熱力学の第二法則と矛盾している事はないのです。進化論者が信じている事はどういう事かと言うと、この世にあるこのすべての複雑なものが、単純なガスから自分勝手に、自ら発生したと言うのであります。これは熱力学の第二法則、エントロピーの法則に見事に矛盾しています。また進化論者は、同じ水素ガスが非常に複雑なこの宇宙に、自分からその姿を変えたと言っています。第二法則に矛盾しています。

【伊規須——幾つかまとめて質問します】

▲不変の証拠が多数あると言うことでしたが、一方では生物が環境に適應して変化している事も事実であります。すると、種とは何かと言うことになりましたが、常識的な所で結構ですから、お話戴けたらと思えます。

【ギッシュ博士の回答】

△神がそれぞれ造られた種の中に、適應性の幅広い範囲を置かれました。それぞれ造られたものは遺伝子的に全く同じものであると言うことであります。ですから、それぞれ造られた違う種によって、幅広い適應の範囲がありますので、一箇

所ではなく、地球の全面に広がる事が可能になる訳であります。

(国立水戸病院院長三上氏——通訳を兼ねて同行中)

△種とは決して変わり得ないものではなく、幅がある訳です。たとえば血液にしても、A B型にしてもM N O型にしても、また人の皮膚の色にしても、黒色白色黄色あり——しかし、最初の人にはそれら総てを含むところの遺伝子系があった。それがだんだん分化して、色々な人種になって行ったと言うのが、聖書の教えであります。ですから祖先の犬だったでしょう。しかし、一口で言えば雑種だった訳です。そしてそれが変化して多くの現状の形を持っていると言えます。しかも雑種と言うのは、いろんな環境に行きますと、その環境で生き残れるような形態を遺して行く。ですからノアの洪水までは地球上の環境はどこも同じ状態でした。ところが洪水以後、上の水の層がなくなった為に、北極は寒く熱帯地方は暑くなりました。そういうような事で住む所によって、生活様式また皮膚の色とか様々な適応条件があった訳です。そういうふうに変わって来た訳です。私達は髭剃りを持っていますですが、それを造る会社がちゃんと考えていけば、日本だけでなくよその国でも使えるような細工を入れる事が出来ます。創造者

である神は、世界の創造の時に、これから起こるであろう環境の変化など全部を考えられました。ですからそういうアレンジする仕組みを人間の体の中に、また総ての動物の中に、遺伝子の中に組み込まれたんです。それを遺伝子給源と言っている訳です。

【伊規須質問】

▲最初から完全な形で造られたと言われました。では何を完全な形と定義されるのでしょうか。また神様は不完全なものを選んで完全にされる方であると思いますが、すると方向が逆のような気が致します。

【ギッシュ博士の回答】

△神が総てのものを、始めに完全な状態で造られたと信じます。しかし、この宇宙の中、また生きているものの中には不完全なものがあります。それは、出来上がる途中と言うことではなくて、何かが欠けている、何かが間違っている、どこかに欠陥があると言うことです。それはいつ起こったのでしょうか。熱力学の第二法則、エントロピーの法則が宇宙を支配し始めたのはいつだったのでしょうか。それは人が神に対して反逆し、罪を犯した時に起こったのだと私は信じています。聖書によると、この時に何が起こったかと言うと、世に

罪がもたらされ、それと同時に、痛み、病、あらゆる苦勞、不完全なものがこの世にもたらされたと記されており、現代科学がこの傾向を発見するだいぶ前に、聖書に既にこのことは記載されており、詩篇一〇二篇二五節にまず、神が天と地とを創造された事が述べられております。現状の宇宙はどのようにあるかと言うことが、二六節に述べられています。「これらは滅びるでしょう。しかし、あなたは長らえられます。これらはみな衣のように古びるでしょう。あなたがこれらを上着のように替えられると、これらは過ぎ去ります」。即ち、我々が着る着物と同じように、始めは新しくなりましたが、使っているうちに古くなってだめになってしまふ、そういうものが宇宙であると、聖書に書かれています。そしてまたロマの八章には、宇宙の総てがこの死の法則に縛られていゝと言うことが書かれています。この詩篇は今から三千年前に書かれたものであります。聖書が書かれた時、殆どの人はそんな事を信じてはおりませんでした。その当時の人は何を信じていたかと言うと、宇宙と言うもの、物質と言うものは、永久に不変であると信じていたのです。しかし、聖書によると、そうではなくて宇宙と言うのは、だんだん磨り切れて、だめになってしまふというふうに書かれています。

これは科学的に立証される言葉であります。ここ百年間行われて来た研究によってこれが立証されたのであります。よつて、聖書に書かれている通り、宇宙は今だんだん下向きに崩壊の方向に向かっているのでありますけれども、神様の約束はそれをまたあがない、新しい天と新しい地とを造られる事にあります。

【伊規須——最後の質問】

▲聖書、伝道の書第三章十一節に、「人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされる業を初めから終りまで見極める事は出来ない」とあります。従つて、創造に反対する立場も、立証しようとする立場も、人間が究める事が出来るだらうかと思ひます。進化論と創造論とを、一刀両断に割り切つてしまふ事が出来るだらうか、先程ちょっと先生がおっしゃいましたように、神様の創造と言うものが非常に柔軟であり、たとえば生物のある種をお造りになる時に、それが遭遇するであらう処のあらゆる環境に適應し得るプログラムを内臓したものであるとすれば、進化論などは取るに足らないたわごとのような氣もしますが、その点いかがでしょうか。

【ギッシュ博士の回答】

△その通りです。神がいかに世界をお造りになったかと言うことは、我々人間に知り尽くす事は不可能であります。よって、人が私に、神がどうやってこの世をお造りになったのですかと聞きますと、私は次のように答えます。神の道は人には計り知れない、次元の違うものであります。人が知るのは自然の法則と、自然の過程だけであります。しかし、創造の時に、神はこの自然の法則、自然の過程をもお造りになったのです。ですからこの宇宙、またこれらのものをお造りになる時に、この世に勿論無い、この宇宙には無い法則と過程を用いられたのです。これらの事を我々が知るのは神様から直接、生物学、天文学……によって——であります。

以上（一九八六・五・一四記）



榎本牧師曰く

「恵みに預った数をかぞえなさい」

古 屋 とみ子

◎病気歴

「わたしは生まれる時からあなたに寄り頼みました。あなたにわたしを母の胎から取り出されたかたです。わたしは常にあなたをほめたたえます。」（詩篇七一・六）

——幼年時代——

- 。 故兄曰く「雑煮を喉につまらせる。目に星が出来るので、おぶって通ったゾ」
- 。 故父曰く「女中が揚げた魚の天婦羅で食中毒。とみ子が一番ひどく、次は広（弟と一緒に入院したのを覚えてる）。大きな注射で助かった」。

——小学生時代——

- 。 故父曰く「九大に連れて行きなさいと言われたが、仕事が多忙で、暇がなく……」（私の前歯（乳歯）一本多い為に、歯並びが不揃い。中学生の時、泣きの涙で直す）。

- 。 故兄曰く「目が近・乱視と思っていたが、字が読めないのところがうのか!!」（家庭教師だった兄）そして、ある日、「とみ子!!目をしっかり大きく開けろ!!」（写真家希望に燃えていた兄）。

——中学生時代——

- 。 学校の主治医曰く「入院しなさい」。
- 。 義母曰く「あなたが泣いた為に、一年間、体育の時間だけ休ませた。しかし、他の病院で調べてもらったら、治った跡だった」。

——高校生時代——

- 。 体育祭で応援に行った後、日やけがひどかったり、皮膚が弱い為、泳ぎに行っても水ぶくれ。（だから今でも、カナズチ）

——青春時代——

- 。 人に負けまいと頑張った為に、疲労して注射通院……写真日記帳残る。

——神の子時代——

- 。 榎本牧師曰く「ごみの中」（空気が悪い所で働いたので、喉を痛め、咳が続いた）
- 。 会社（ビル）で、クーラーにかかりすぎて冷房病? ↓ダウンノ

。以前、我家の二階から落下。(腰痛で恵まれた——。岩隈姉達と一緒にヨガ体操始めた。続くことに感謝)

。風邪に弱い私が、寝こんで覚えた静思の時の尊さ。神様はこんな者にも、永遠の命を与えて下さり、あわれみをもつて、守って下さっている。

「静まって、わたしこそ神であることを知れ。」

(詩篇四六・十)

◎ 遍 歴

「主なるわたしは、変わることはない。」

(マラキ三・六)

高校卒業して、早や二十年になった。高校が若松にあったので、その地で就職した。ところが数ヶ月後、店が移転する事になり、家から遠方になる為に、退職した。家がある戸畑の地に帰って来て、近所の店へ洋裁を志して就職した。とても便利がられて、夜遅くまで働いた。一生懸命頑張ったが、報いは少なかった。それに不満がつのり、出来もしないくせに、文句を言った。「隣の芝生は、良く見える」もので、好奇心旺盛で、とにかく先輩がとめる忠告にも耳をかさず、小倉に移った。その時初めて、父が、「おまえが氣にいる様な店はない。少しは辛抱強くなれ。——辛抱！」と言われたが、

私はしたい放題だった。しかし、どこに行っても、自分が満足出来る様な店はなかった。女性の世界——まんねりの仕事(店)。

ところが、突然、予告もなしに、父がいなくなった。私は、立派な事を言いながらも、父を頼っている事を知った。悲しい思いでいっぱいだった。

その後、私は自分が求めているものは、空しいものだと思った。父は天国の国籍をもって、イエス様の道を、ひたすらに走っていた事、又喜んで神様のもとに帰った事を教えられた。私も父の歩いたその道を、求めたいと祈った。

それから五年。いろいろな人と出会い、そして別れ、私は生まれ故郷、戸畑に帰って来た。うれしかった。「神様！私に店をもたせて下さい」。しかし、現実はずいぶん。看板もかけられない、電話もない、資本金もない。ないないづくしで、あるのは、屋号だけ。祈りによって、「なんでも縫います店」とさせていただけ、又、ヨハネ福音書第十五章五節の御言葉を与えられ、私は今その店で、イエス様を店長として働いております。とにかく、小物・リフォーム・婦人服なんでもおまかせ。なんでも縫っちゃうお店です。(ただし、紳士服はゴメンして。ズボンの丈上げ位は出来るかもネ！)

みなさま、どうかこのお店が神様と共にある様に、お祈りして下さいませ。又、私のタラントを充分に発揮出来る様に、よろしくお祈りお願いします。(CMは、終り)

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。」

(ヨハネ一五・五)



いざなえの杖

上野 米子

御聖名の故にいつも「ぶどうの木」を通して皆様とお交わりをさせていただきますお恵みを感謝申し上げます。この度も拙きを省えり見ず寄稿させていただきました。神様の御祝福を祈りつつ……

コツ……コツ……コツ……朝のしじまを破って遠くかすかに杖の音がする。だんだんと大きく、又小さく杖の音は我が家の前を流れて行く。どなたの引く杖だろう？ 毎朝必ず、朝の五時から六時の間である。私はその音を聞く度に、死の谷間にいざなわれる響きに聞きとれて仕方がない。

今は主に在って罪無き者とされているが、かつての不従順なこの世的の罪の自覚の故でしょうか……。

どんな方が引かれる杖かと私は思いある朝、姿を見とけました。体格がよく麦わら帽子をかぶってTシャツを召した七十才台の老人でした。足が悪いのでしょう、杖を助けとして居りました。

ある日、私が外出からの帰り道我が家の見える四つ辻のところを二間程先をその老人が歩いて居りました。ところが突然、その方が一回転して仰向けに倒れました。めがね、帽子、買い物袋がまわりに飛び散りました。脳溢血？ ハッとして私はかけ寄り言葉をかけましたが、答えがありません。まわりの物を寄せ集め、「大丈夫ですか、杖はどうしましたか」ともう一度問いかけましたところ「大丈夫です、杖は忘れませんでした。ビールを飲んで来たものですから……トンダ醜態をお目にかけて、お恥ずかしい」と言って、二度、三度起きようと思いましたが立てません。起こして差し上げようと思えばそばに寄りましたが、お酒のにおいが強く、そして又、太って居りますので、私の力では及びつかないと思い、「ここは四ツ角で車が来ますから角のお家の玄関先をお借りして休まれますよいですね」と言いおいて、ひとまず私は荷物を置きに家に帰りました。程経て時間で五分から六分位でしょうか、玄関を出て先の処を見ましたら、もうそこには老人の姿はありませんでした。不意の出来事に私は考えさせられました。

本心と立前。教会で先生から主の御愛に付いて教えられておられますのに、「己れ愛する如く汝の隣人を愛せよ」と。本心はどんな事があっても助け起こさねばならぬのに……

もしも御近所の人がこの光景を見ていたら……と立前を気にしてそれが出来ませんでした。

これかもしエス様御自身でありましたら、どうしたでしょうか？ かけ寄ってもどんな状態の中でもお助けしたであろうと……。いやーひょっとしてこれは主が私の心を試みられたのではなからうかと、思いは千々に乱れました。

あれからも杖の音は、きまって私の枕辺にコツ……コツ……コツ……と音を残して消えて行きます。どうしてもあの響きは主が私への警告として教えて下さいますようにほか聞きとれません。

そして四、五日過ぎてからお会いしました時、「あの時はお世話になりました。あなたは上野さんでしょ？水道をひく時はお世話になりました」と挨拶をいただきました。雲間に月の光が少しのぞいた時のように、私の悔いた心もちょっぴり晴れました。

「米子よ、勇気を出しなさい」主が門口に立って私の心の戸を叩いて居ります。

いざなえの杖、あの方にとってはお体を支える大切な杖。それでは私のいざなえの杖はなんでしょう？ 言うまでもなくそれは魂を支える御聖書の御聖言です。

今日も又、御聖霊のお声が私にささやいて居ります。

「我らの願えりみるところは、見ゆる者にあらで見えぬ者なればなり」
(コリント第二・四・十八)

「恐るゝなかれ、我汝と共に在り」(イザヤ書四十一・十)

「主に在って堅く立て」(ピリピ書四・一)

「我が今の如くなるは、神の恵みに由るなり」

(コリント第一・十五・十)

神様 お聖言をありがとうございます。

主の御聖名を崇めて感謝申し上げます。

エス君の血潮仰ぎて今日も亦

我は在るなり神の安きに

(その日その日より)

母の救い

筑山 寿々子

六十年十二月二日、母は三度目の入院生活をする事になりました。その都度、看護で里帰りをくり返していました。父母(老人)二人暮らしなものですから……長女である私は責任を感じ、両親の救いについては、私共、先に救われた者の長い間の祈りの課題でした。

イエスキリストについて何も知らない母にときあかすには、説得力もなく、ただ祈りあるのみでした。

今から五年程前、二度目の手術の時、二人部屋で同室だった善隣会の熱心な信者さんに導かれ、幾度か共につどいに行っていた様で、体が思う様にならない時には、薬をもつかむ思いだったと思います。ズルズルと回を重ね、善隣会で病気を(足の痛みや体のあちこちの痛みを)直していただきたく、熱心になった様です。

今度三度目の入院で、看護に参りました時は、善隣会でなければという状態で、私は本当にショックでした。どうしたらイエス様の話を言って聞かせて上げられるか……。

これは、私の思い上がりであることを教えられました。

そして、只々事々に祈るのみでした。長い間家をあける事も出来ず、いろいろな用事もあって、里（病院）と八幡を行ったり来たりでした。

母の病状は、以前とくらべて今回はよくない様子でした。主の導きを待ち望む毎日でした。丁度、二月十九日の夕方、神戸の妹と夜の看護の交代で帰りの際、母のとても淋しそうな、何とも言えぬ表情を見ました。私はお祈りして、又「明日」と言って里の家に帰りました。父はもうしばらく病院に残るとの事で、父と妹の二人は病院にいました。一時間位たって、妹から電話で、母が血を沢山はいた、父ではどうにもならぬので、すぐに来て頂戴とのことでした。（母の病名は直腸癌が肺に転移したものでした）。

病院に引き返し、その夜、妹と二人で看病しました。

二十日の朝、病状も落ち着いたので、十時頃、妹は里の家に帰り、母と二人きりになりました。体のだるさをうったえ続けける状態でした。母の手をとり、抱きながら一生懸命お祈りしました。すると母は、自分が迷っていた事を告白し、イエス様を受け入れました。感謝の涙があふれ、言葉にもなりませんでした。一生懸命祈りました。

母は「ありがとう」「ありがとう」と幾度も言って、うれしくて二人で抱きあって泣きました。主は生きていらっしやる事を目の前に見て、それから病状はよくはないものの、平安が与えられ、何時召されても天国に行ける事を心から感謝して、筑山のおばあちゃんのいる所に行きたいと、ことある毎に言っていました。まだこの世に使命があれば、神様はどのような事をしてでも生かして下さるといふ事を信じてお祈りしました。

丁度、前田教会では二月二十日木曜会のあつてる時刻だと思ひ、榎本先生の御声が聞える様でした。感謝でした。

今度の様に、主を信じて歩ましていたでいる事をうれしく思った事はありませんでした。その夜、妹も一緒にイエス様のお話をしました。感謝で一杯でした。

神様の御手にお委ねしましたので、心の平安が与えられ、讚美歌すら知らぬ間に口ずさんでいました。

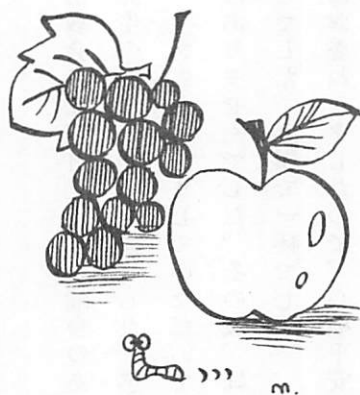
幾日病院での生活が続くかわかりませんが、ただ祈りと讚美をもって感謝しつつ、一足一足恵みを教えつつ、歩ましているだけでいます。

一日一日あまりいい状態ではなく、召される日が近づいてる様な気がしました。

二月二十三日の日曜日、弟夫婦、末の妹等十一人病院に
いました。一人部屋の病室は家族で一杯でした。母は一人一
人に別れの言葉をねんごろに伝え、一日中語り続けました。
看護婦さんにも一人一人「ありがとう」「ありがとう」と言
っていました。その夜、意識はモウロウとして来ました。尿
の出が急に悪くなり、点滴（昼夜やむことなく）注射のかい
もなく、二十六日（火）夜明け前五時半、呼吸がだんだんと
遠くなり、ついに眠る様に天に召されました。その時顔は、
十才も年若く感じる程にきれいな顔になり、天国に召された
事を確信しました。主が生きていらっしゃる事を心から感謝
しました。

母のいます天国に召していただく迄、心をつくし、精神を
つくして、主の御言葉にお従いして歩ましていただきたく願
っています。

榎本先生を始め、皆様にお祈りしていただきました事を心
から感謝し、御礼を申し上げます。本当につたない歩みしか
出来ません。お祈りの中に加えて下さいます様お願いいたし
ます。



神様の裾にすがって

伊規須 泰子

① 退職

◎ やっと、昭和六十一年三月三十一日に、三十一年二カ月勤めた仕事から離れる事が出来た。「やっと」と言う意味は、これまで何回か退職の（と言うより本来の姿に戻る）決断を迫られた。先ずは祈って、それが為すべき道であり、最も良き道であると分かるのだが……自分の考えが先走り、保育の道は私に与えられた使命のようだ……とか、仕事が一子供が一好きだから、とか、我子もいないのに、辞めて何をしたらいいのだろうなど、理由を付けたり、不安を覚えたりで、決心を避けていた。

◎ それがある日、ある時、「だんだん年令はとっていく、確実に気力は衰えていく、少しでも気力のあるうちに、明日よりも今日、少しでも若いうちに、僕と一緒にいないか」と言った主人の言葉で「即」の返事はしなかったが、ふっと決心がついてしまった。それは主の憐みによる以外にない。

◎ ここで、もう一つ私は、憐みにすがった。決心はついたが、その時から一年九カ月、待つて欲しいと思った。手遅れになるかもしれないという不安がよぎった。しかし、一年九カ月が欲しかった。

◎ という事で、昭和五十九年六月に昭和六十一年三月三十一日退職の決心をさせていただき、歩みが始まった。後の事があるので上司に申し出たところ、度々引き留められた……お世辞と思うが、重要な人だから、もう少し欲しいと持ち上げたり、困る、淋しい、と心を揺さぶったり、定年前なのに勿体ない、今辞めたら条件が悪い、と教えてくれたり……だが、私の心は一つも揺らぐ事はなかった。

◎ さて、その歩みの心の準備、第一は教会の事

集会に近づく（今までも出席していたが）。事ごとに祈る。特に礼拝で声を出して祈る……少し余談だが、これは私にとっては、非常に勇気のいる事だった。この為に前日から祈りの準備がいった、又、一言発する決断！ぐーっと飛び込む踏み切り、一海水浴で高い飛び込み台から飛び込む、あの気持が必要だった。声を出して祈ると、それに対して自分自身の責任が有るから、真剣になり、とても恵まれる……聖書を読むこと。生活の中で教会第一にする

こと（これは当たり前前の事だが）

◎ 次に職場の事として

○ 職員の指導？として、一人一人（十六人分）のノートを作って、気づいた事を記していく。これはノートを作り書き始めたが、完成せず、最後はカード一枚になってしまった。

○ 事務的の整理、環境の片付け。整理要綱に基づき、不用の物を焼却する。誰が見ても分かるように分類整理する。必要の物を取り揃える。

○ 六十年度の行事、会議に出来るだけ参加する。子供に、職員に、保護者に積極的に接する。

○ 公機関、公立所長会、同和保育所長会への尽力。

○ 後任者の希望を上司に強く働き掛ける。

職場を愛していたし、協力し合える職場になっていたし、そのあり方が目の前の成果でなく、子供の将来を見るの保育であった事が大好きだったので、この考えを受け継ぐ後任者であって欲しかった。

これは六十年実現せず、六十一年私の希望どうりになった。ここでも神様の憐みを知る事が出来た

という事を心に決め、常に眼を昭和六十一年三月三十一日に

置き歩き続けた。

という経過があつて、「やっと」昭和六十一年三月三十一日に辞める事ができた。

◎ 三十年間の職場を辞め、振り返ったとき

大過なく過ごせた、つつがなく勤務出来た、など平凡な言葉では表現できはしない。神様の御思いとは逆の歩みをしてきた私なのに、絶えず共にいまし、支え導いて下さった事に言い知れぬ感謝を捧げるばかり。

◎ 今！

少し大袈裟だが、子供の命を守るといふ緊張から解放された思いはある。

本当は子供の魂の方が、ずっと大切なのだが、保育という仕事には常に命を保護するといふ使命もある。懐かしみもある、どうしているかな？という思いもある。しかし、それらから気持を離して、戸畑教会となって与えられている私の使命と、主婦業という副業に楽しみを見出つつ、歌いつつ歩いている今日この頃です。

◎ 主婦という仕事

◎ 永年勤めた仕事を離れた。その間三十一年二カ月、結

婚して二十五年五カ月、今、初めて（子供はいないが）主婦という立場に立った。主婦といってもピンとこない、しかし、日々が始まった。すべて主に従う事が大前提。

◎ 祈ること―これは肝に命じる、積み重ねる時喜びが湧く。

聖書を読むこと―集中して読む時間は確保したい。

集会の準備、出席―生活のスケジュールに組み込まれて
いる。

◎ その上で主婦の仕事にお目にかかるわけだ。

勤めの合間に家事をがたがたしてしまふ癖が付いているので、つい手早くしてしまふ。食事の用意、掃除、洗濯、家事の先取り、時間的に動く癖を先ず直さねばならない。ゆっくり、丁寧にしなければ、しかし家事とは、食事の用意の多い事に驚く。これが生活だと言われて、成る程とは思ふ。魂を養う事は大切、健康を維持する事も大切、主婦としての使命かとも思う。そんな事を考えながら買物に行く。勤めていた時は気にならなかった物品の値段がとても気になる。新聞広告の特売品をあさり印をし、目ざして買いに行く。頭、目、足を使うと随分安上がりになることに驚く。

◎ 運動不足にならないように注意する、買物は速歩、少しの用事でも気軽に出る、こまごまと動く。仕事とは次々と

あるものだという事が、だんだんと分かってきた。今のところ仕事を探したり工夫したりしながら楽しんでいる。

主婦の仕事がマスター出来たら、第二段階を望んでいる。ワープロ、エレクトーン？、ペン習字……無理かな？

それより祈れ、……尤もです。何はともあれ主婦という立場、家事という仕事、色々あるものです。食事準備、掃除、洗濯、買物、整理、応対、その他目に見えない事。昼寝にはなかなかありつけない。神様はそれぞれに必要な知恵と力を与えて、日々を楽しませて下さるといふ事を知った。

③ 前田教会、日曜学校一級

◎ ひよいと気が付いたら、日曜学校の御用をさせていたでいて、三十年を越していた。他人に物を言う事の嫌いな私。話す事が下手な私。要するに頭が悪い私……こんな私だから一回一回、一言一言祈って依りすがらなければとても御用は、出来なかった。三十年として、一年に五十回×三十年＝一五六〇回、それ以上の御用をさせて戴いた事になる。よくもまあと、驚き感謝する。しかも何回話しても、話す事に馴れない。いつも、オドオド、ドキドキ神様の裾をしっかりと握っている状態。一五六〇回目だって、

一回目と少しも変わらない胸の高鳴り、だから私の力ではない、神様の業とはっきり分かるのです。口下手な事、内気な事を良かったと思えるのです。

◎ 日曜学校一級は、小学三年以下のクラスだが、教室を色々代わった。(1)旧会堂の増築してない時、片隅にベンチを四角にして (2)階下牧師館の畳を縦に並べた四畳の部屋 (3)階段の下の廊下、即ち、牧師館の玄関の板張り (4)旧会堂を増築して和室 (5)旧会堂増築部分、後部、カーテンで仕切って (6)新会堂になってかなは、右側の祈禱室(小さい和室)で、ずーっと。ここは落ち着いた部屋で、……ヨハハネ二〇・一九自分たちのおる所の戸をみなしめているとイエスが入ってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。……の場面を思い起こす。

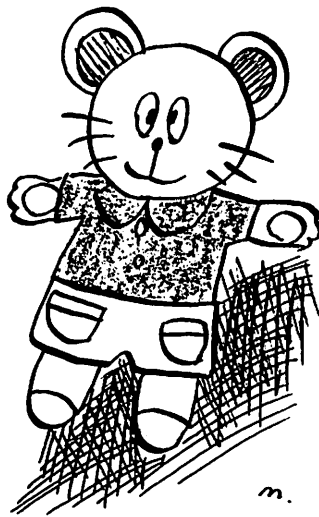
◎ 私はずーっと一級だったが、相棒は代わった。理由は大体結婚のようだ。調悠子(正野)さん、松山詔子(清川)さん、下松洋子(花倉)さん、太田久美(鳥越)さん、小松瑞枝さんという具合。

◎ 満二歳になればもう一級に参加出来る。この柔らかい魂が御言葉を受け取ってくれた、そのまま受け取るこの子たちに対する時、真剣にならざるを得ないし、私自身が神様

の裾をしっかり握っていないと倒れる。

初期の子供は、もう二〜三人の子供のお母さんになっている。前田教会のあの部屋で祈った祈り、受けた御言葉、子供たちの信仰、思い出、今思い起こして感謝を新たにしつつ、戸畑教会に来ました。

(一九八六・五)



すべてが新しくなったのである

野 口 美 加

私は小さい頃から、休まずに教会へ通っておりましたが、実際従っていないだったのでしよう、神様に従う願いはありませんでしたが、信仰の進歩がありませんでした。

信じてバプテスマを受けましたが、準備の時に、榎本先生の後についてお祈りしただけで、まだ本当のことがわかっていなかったと思います。自分が、罪人の頭であるとは頭だけの理解で、本当に自分が罪人の頭であると痛感できた事がありませんでした。そこで、今年の暮れ頃、遅ればせながら、「自分が、罪人の頭である事をわからせて下さい」と祈っていましたら、ある時、床の中でお祈りしていた時、その祈りが真実でないことを悟り、神様の前の自分の態度を示され、その時、「自分は罪人の頭だなあ」と、心に感じました。

そして、その事を人に話して感謝しました。また、聖書を読んでいて、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきて」という聖言に目がとまり、自分のこれまでの人生を振り

返って、本当にその通りだなあと痛感し、感謝しました。

でも、自分の状態を見て、失望することもあります。ある時、これではいけない、なんとかして成長しなければならいと、台所でお皿を洗う手を止めて、「わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに变えて下さるであろう、と聖書にありますから、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに变えて下さい」と、真剣にお祈りしました。すると、これまでは、これが正しく神様の御旨だということを感じた経験はなかったので、この時、『すべてが新しくなったのである』との御言が与えられ、ただ心に思いつかんかだというのとは違って、正に神様の啓示のように感じました。古い台所には裸電球一つでしたが、いつになくそこが明るく輝いているようでした。

『見よ、すべてが新しくなったのである』この聖言をいただいたからには、地上における生涯の中で、どんな困難をもこの聖言を握って乗り越えて行こうと思っております。

そして、これから、善悪を見わける感覚を実際に働かせて訓練され、光の子らしく歩いて行きたいです。

こうして、聖言をいただけたのは、皆様が祈って下さったことと感謝致します。

神の子 トンちゃん

古野 とみ子

(1)

「あなたがわたしを選んだのではない。

わたしがあなたを選んだのである」

(ヨハネ一五・一六)

私は、「神様から選ばれたんだから……」と偉そうに言う。すると、姪はあまりいい返事をしません。「とみ姉ちゃんは、おどり出たんだらう？」って言うのです。「なに!! それ?」って聞き返すと、近頃は、自分から売り出さないとダメな時なんだって。「あっ! そうか!!」と納得しました。

「野村先生は神様から選ばれたと言う感じはするけどネ!」と姪達は言います。「でも、勇気があるのよ!」と言うと、二人が今度は納得しました。ハッピー!!

(2)

「光の子らしく、歩きなさい」

(エペソ五・八)

「トンちゃん! これ!」 「なに?」と紙きれを見た。それ

には、なんと、「豆腐屋の子らしく、あるきなさい」と書かれてある。(いつも私が、戸畑伝導所の子供集会のみことばカードをいただいているので、その言葉にひっかけて作ったらしい)ほんと! 私は以前、豆腐屋の子だった。しかし、今は神様の子供としていただいている。こんな者を、父なる神様は、多くの中から目をとめて選んでくれた。感謝!

(3)

「あなたのあかしは、とこしえにわが嗣業です。まことに、そのあかしはわが心の喜びです」(詩篇一一九・一一一)

「ありがとうございます……イエス様!」

「とみ姉ちゃんは、病気だね!」

「なんの病気なの?」と。

すると、「イエス病よ」と言う。

(4)

「主なる神は、へびに言われた。『おまえは……おまえは腹で這いあるき、一生ちりを食べるであらう』」

聖書の中にある「創世記」が好きな千津香ちゃんが言った。

「トンちゃん、神様はなんでも、良し」とされるんだね」

そして、へびに興味をおぼえて、又言った。

「昔、へびは這いながら歩いてきたのだろうか」としきりにたずねます。そして、「伊規須先生に、聞いてきて?」

——トンちゃんの心の中(イヤーン!そんなことはすかしい)

(5)

「神にはなんでも出来ない事はありません」

(ルカー・三九)

中学の同級生が福岡に帰って来たと聞き、子供達に会うのを楽しみにしていた。子供達の中でも、男の子が恥ずかしがって、なかなか心を開きません。すると、おやつの時間になって、私が目をつぶってお祈りをしていると、男の子が大きな声で「ねむったら、いけんよ」と言いました。私はびっくりしたと同時に、笑い出してしまいました。そして神様が、子供の心を開いてくれた事に感謝しました。

(6)

「あなたの若い日に、あなたのつくり主を覚えよ。悪しき日がきたり、年が寄って『わたしにはなんの楽しみもない』

と言うようにならない前に」

(伝道の書十二・一)

姪達と行動を共にし始めた。これだけつき合えば……と下心を出す。そして、「神様に、力を与えてもらおう」と祈る。「今年のクリスマス祝会に是非来ませんか」とカードを隣の

室に出す。すると、二人揃って、喜んで来てくれて、本当に感謝、感激しました。

「来年も!」と欲ばらないつもり。来年は、神様におまかせします。



(7)

「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない」

(詩篇二三・一)

。登場人物 トンちゃん(受洗して、早や三年)

。まゆみちゃん 一九八二年作る。

。チイちゃん 「おともだちの会員」

。場 所 様々

。日 不明

トンちゃん「私、朝方、夢だったのかわからなかったが、右手を動かそうとしたら、頭の下にあって動かなかったの。それで、左手を動かしたら、誰かの手に触れたの。それがとても生ぬくかったので、びっくりして目がさめたのよ」。

チイちゃん「その人の手には、穴があったの？」

トンちゃん「(一瞬、ポカン!!)」

チイちゃん「だって!! イエス様の手には、穴があるんでしょ!!」

トンちゃん(頭の中)「ワア!!この子、恐ろしい!!」

* * *

トンちゃん「日曜日、お天気どうやら(友達結婚式なのだ)」

まゆみちゃん「お祈りしていたら!!」

数日たって

まゆみちゃん「レコードほしいなあー、買えたらなあ!!」

トンちゃん「お祈りしていたら!!」

まゆみちゃん「こういう風に祈るのかと、手を組み合わせせて

下をむく。)

トンちゃん(アーメン)

* * *

隣室に行って、こたつに入る。

私は、勉強している様子をジロツとうかがっていた。チイちゃんは、なんとなく私を見た。そして「トンちゃん、たまには聖書を読んだら!」と言った。私は、一瞬「やられた!!」と思った。

ある日、野村先生に言いつけている。(言いつけマンめ!!) 私、神様に言いつけマンしょーと。

* * *

まゆみちゃん「トンちゃん/キリストの三元徳、知ってる?」

トンちゃん「ナニ……。得をするとかね?」

まゆみちゃん「ちがうよ。得をするとかではなく、道德のと

くよ……」

まゆみちゃん「……(一生懸命説明してくれる)」

トンちゃん「キリストの三元徳(信仰・希望・愛)、ギリシ

ヤの四元徳(知恵・勇氣・節制・正義)。ヘエ!! すぐ

いねエ。倫理社会で教えてくれるって!」

まゆみちゃん「さんいいたい……って、知っている?」

トンちゃん「それ/ (三位一体)よ」(偉そうに言う)

「そんな事も教えてくれるの。意味知ってる」

トンちゃん(問うが返答なし)

まゆみちゃん……（妹のチイちゃんに説明する声かきこえる）

トンちゃん「私も知らなかったけど、三位一体に自分が入ると言ったら、教会の姉達から笑われたのよ。どうして、人間が神様なのかって」

……少し間があいてから……

まゆみちゃん「今日はキリスト教で、明日は仏教よ」

トンちゃん「へエ!! おもしろそうね」

まゆみちゃん「ゴルゴダの丘……」

トンちゃん「どこにあるって?」「なにノ先生が『本当は十字架でなく、棒だった』って。でも、聖書には、十字架だと書いてるよ」

まゆみちゃん（ごちゃごちゃと言ってる）

トンちゃん「数学の先生は崇拜していて、キリスト教の話をした今日の倫理社会の先生は、尊敬しているって言うの」

まゆみちゃん「だってノ先生、話がうまいんだモン。九大出身で……すぐく……ききほれるヨ……」（大きな声）

トンちゃん「（笑う）先生って、みんな勉強しているからね!!」「おもしろいからいい先生なのね」「へんねエ!!」

——この後、お互いは読んでいる「アガサ・クリステイ（推理小説の女王）」の話題となる。クリステイの愛用した詩



「テレホン聖書」

○九三一八八一—〇五九テンゴク

伊規須 太郎

一九八五年六月六日開設。毎週月曜日に
テープを交換。実際は左記のほか集会案
内などがあり、一回は一四五秒程度



国鉄戸畑駅 新中原駅 その他に出した広告シール
実物のサイズは一辺が約20cm
黒い部分は赤色、093-881-1059は黄色です

命のパン

「私は命のパンである」(ヨハネ六・四八) ▼最近パンの種類も多くなりました。しかし、命のパンとは何でしょうか。旧約聖書の預言に基づき、神様がこの世にお遣わしになった神の子、イエス・キリストは、私達の魂を養う命のパンです。▼人間は動物と違いますから、ただ肉体が健康であっても決して満足はありません。▼イエス様は「私の肉を食べ、私の血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」と言われました。▼イエス様の体を、お肉のように食べなさいとおっしゃった訳ではありません。私達の為に十字架にかかって、肉体を裂き、血を流して下さった事を、心に受け止めて欲しいと言われるのです。▼この世では人の上に立つ事が偉いとされますが、神の子であるイエス様は、むしろ人の世の最も低い所まで下って、私達の為に死んで下さいました。そして、「受けるよりも与える方が幸いである」と模範を残されたのです。▼金持ち貧乏と言う言葉があるそうです。我々日本人は、個人としても国としても、生き方を見直すべき時に来ているのではないのでしょうか。▼私達の教会のある青年は、海外医療協力隊に奉仕したいと願っています。彼は自分の事を考えて、開業しようと思えばいつでも出来るのですが、若いうちに世界に貢献したいと願っています。勿論資金や技術が本当に人を活かす事は出来ませんから、私達が活けるパンをしっかりと食べて、人間の生き方のノウハウを輸出できるようになったら、何と素晴らしい事でしょうか。▼あなたも是非この命のパンをお上がり下さい。自分の事を考えなくなると身も心も豊かになります。(TS〇九三)

互いに足を洗う

「私があなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互いに足を洗い合うべきである」(ヨハネ一三・一四)▼最後の晩餐の席で、イエス様は弟子たちの足を洗われました。驚いたペテロが「どうして私の足を洗われるのですか」とお尋ねしたところ、「今は分からないが、あとで分かるようになるだろう」とおっしゃいました。その後、食事をなさいましたが、御自分が私達の為に肉を裂き、血を流される事を示して、永遠に記念するよう命じられました。その間、最後の御説教をなさいました。▼弟子たちはそれまで誰が一番偉いかと互いに言い合っていました。▼ですからイエス様は、御自分が仕える為に生まれ、多くの人に自らの命を与えることを話され、偉くなりたいと思う者は却って仕える人にならなさいと、このように模範を示されたのです。▼イエス様は「受けるより与える方が幸いである」と言われました。▼私がかつて自分の事しか考えませんでした。しかし十字架によって、全ての罪が許され、神様が私の責任者となり、全てのものを満たして下さると分かった時、自分の事は考えなくなり、多くの人々の救いの為に祈るようになりました。そうすると、身も心も豊かになりました。▼神様は私達に無いものを縫れとは言われません。私達を豊かに満たして溢れさせて下さるのです。▼雪のヒマラヤ山中で、行き倒れの人を見捨てた人が凍え死に、自分の身を顧みずに背負った人が、却って救われたとは有名な話ですが、私達はまず救い主を知って、この模範に倣おうではありませんか。(TS〇九八)

良い羊飼

「私は良い羊飼である。よい羊飼は羊の為に命を捨てる」(ヨハネ一〇・一一)▼イエス様は私達の羊飼で、私達は羊です。▼この辺りではなかなか羊を見る事が出来ませんが、羊はおとなしく、従順であると言われますが、反面、愚かで弱く、迷い易いそうです。武器になるような角がある訳でもない、鋭い爪で相手を倒す訳でもない、足が早くもないし、牙が鋭い訳でもありません。これでは忽ち野獣に食べられてしまおうでしょう。▼ですから羊飼の使命は、第一に草や水のある所に導く事。第二に荒い野獣から守る事です。その為に絶えず長い杖を持って警戒しなければなりません。また、絶えず群に気を配って、離れないように導きます。もし崖下にも落ちたら、他の多くの羊を置いて、自らの危険を顧みずこれを助けます。▼イエス様は私達の為に、天の位を捨てて地上に下り、命を捨てて私達を救って下さいました。▼私自分で迷ったのですから、そのまま捨てられても仕方がなかったのですが、イエス様は私の為に、「父よ彼らを許し給え、その為す所を知らざればなり」と、執り成して下さいました。それによって、私は救われたのです。▼ある人は、「従順に従うなんて意気地が無い」と思われるかも知れません。しかし、他ではない、万物の主人公が手を開いて招いて下さるのです。どうして拒む事が出来ましょうか。この羊飼に従う事が、最も意気地のある、強い生涯なのです。▼あなたも、こんなに愛して下さる方と、命が通い合う生涯にお入りになりませんか。本当に素晴らしいですよ。(TS〇九五)

天地創造

はい、こちらは小芝公園のすぐ南、戸畑伝道所の「テレホン聖書」です。お電話を有り難うございました。ご機嫌いかがですか？このたびテレホンサービスを始める事になりましたので、どうぞ続いてお聞き下さい。一回は二分半で終わります。では聖書の言葉をを送り致します。▼「始めに神は天と地とを創造された」これは聖書の最初のお言葉です。おとぎ話ではありません。現実には地球は今も激しく活動しておりますし、宇宙では巨大な星が誕生し、また死んで行きます。その莫大なエネルギーはどこから出ているのでしょうか？それは神様以外にはありません。私達人間もまた神様から造られ生かされています。だれも自分で生きていると言える人はいないでしょう。神様から生かされているから、「私は神様を信じない」と言う！恐ろしい事ではありませんか。▼私もおかつてはそういう人間でした。しかし、目が開かれて見ますと、何を見ても神様の存在を否定する事が出来ません。しかもその方が私を愛し、私の罪を許す為に、一人子イエスキリストを十字架に付けて下さったのです。▼あなたもこのご愛をお受けになりませんか。(TS〇〇一)

神をおそれる

「あなたの一人子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」(創世記二二・一二) アブラハムが百才の時に生まれた約束の子イサクはかわいい盛りになりました。その時神様はイサクをいけにえの獣のように殺して献げなさいとおっしゃいました。柔順なアブラハムが本気でナイフを振り上げた時、神様はこれを止めて「本心が分かった」とおっしゃったのです。▼神様は私達の心を見られます。自分の一番大事なもの——それは自分の考えであるかも知れません——それを惜しまず離れると祝福が流れて来るのです。捨てて拾う、死んで生きるの奥義です。▼私がかつてこの法則を知りませんでしたので、大きな損をしていたと思います。しかし、一人子を下さる程のご愛を知った時、何もかも忘れてしまいました、損も得もありません。足りないながら出来る限りを尽くしてこのご愛に答えようと思いました。神様は私の本心を見て、私と通じて下さいました。今私を見て下さい、神様が確かに生きておられる事がお分かりになるでしょう。▼あなたもどうぞこの真理に従って、神様の祝福にあずかって下さい。(TS〇一六)

主がここにおられる

「ヤコブは眠りから覚めて言った、まことに主がこの所におられるのに、私は知らなかった」(創世記二八・一六)

ヤコブは兄のエサウから恨まれ、身の危険を感じて母の郷里へ逃れました。その途中の出来事です。▼野宿の夢の中で天使たちが天のはしごを登り下りしておりました。その時、神様が「私はあなたの神である——決してあなたを捨てない」とおっしゃったのです。それまで兄の顔ばかり恐れていた彼は、はっと目が覚めました。彼は感謝して神様を礼拝し、誓いを立てました。こうして彼はたくましく生きるものとなりました。▼私達はどうかすると、「なぜ自分ばかりがこんな目に会うのだろう」と自分の孤独と不幸を嘆きます。しかし、キリストを十字架に付けて愛して下さった神様は、「決して捨てない」と呼び続けておられるのです。▼かつての私はこの神様を知らず、淋しい人生を送っていました。今は何が無くとも誰がいなくても心は満ち足り燃えています。今考えると、あの孤独は神様を知る良い機会だったと思います。▼今あなたにも色々な事があります。しかし、今こそ目を上げて愛と真実の神様を認める時です。ちょっと心を開くと、神様もご自分を開いて下さいます。(TS〇二〇)

(註) この放送に対して、通常の二七〇%にのぼる着信がありました。

最初のクリスマス

「家にはいって、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた」(マタイによる福音書二・一一)

家畜の臭いがこもった、ほの暗い馬小屋の片隅、藁の中に寝かされている幼な子を囲んで、厳かに、最初のクリスマスが守られています。長く待ち望んでいた博士たちの喜び、うやうやしい礼拝、真実な献身——彼等は宝の箱から捧げ物を取り出しました。一つ一つが彼等の信仰を現しています。黄金は「あなたこそ真の王です」と言うしるし。乳香は「あなたは真の祭司です」と言う告白。没薬は死体に塗る薬ですから、「あなたは私達の為に死んで下さる方」と言う意味です。

▼私は今年のクリスマスに、もう自分の事を考えまいと思いません。救い主をお迎えするのですから、この方の事を考える。そしてこの方に対して、博士たちのように告白したい、命ある限り、この真の王に仕えたい——と願っております。

▼あなたは、どのようなクリスマスをお迎えですか？ 正しい迎え方はここに書いてあります。今年のクリスマスがあなたにとって、素晴らしい機会となるように祈ります。

(TS〇二九)

心のスナップ

上野 米子

◎ 我が家では、日曜日の夕食は早目にするにしている。

ふだん仕事の関係で、なかなか顔をあわせることが出来ないからである。夕食前に入浴を済ませた息子から「お母さん！お風呂に入ったら……いいお湯よ」と声がかかった。孫二人も湯上がりの裸のままですわいでいる。湯上がりタオルを持って脱衣室に行く。息子は鏡に向って髪をといていた。その

時突然、「お母さん、背中が随分丸くなったね」裸になった鏡の中の私を見て私にくれた息子の言葉だった。「随分見憎いでしょう！」「そんなことないよ。七十年の苦労だもの」思いがけない息子の言葉に、私はこの時程重みを感じた事はなかった。裸のふれあいとは、こんなところにもあるのであらうか！

大人になった息子とは、必要以外、しんみりとした言葉のやりとりは少ない。私はうれしかった「子供も私を理解しているのだな」と思い、「一体この心は、どこから出たのかしら？」

創り主、主より外はない。平和の主・愛の主、平素の御聖言が働いて御聖霊の神が、私へのいたわりの言葉として贈って下さったのであらうと……。

久し振り何時になくくつろいだ気持ちで、湯舟に足、腰を伸ばし、古き時代の私と新しき時代を呼吸している息子との差も、神の御前には間一髪も入れることも出来ない一つ心であることを深く深く感じ、感謝を申し上げました。

◎ 今日も暑い！

昼下がり、私は北向きの涼しい部屋で午睡をとろうとしていた。空も青く抜け、吹く風も磯の香りをのせてひやりとして涼しい。下のお家の栗の木が、手の届く程に我が家までに伸びている。小さな青いイガは、丁度マリモのようだ。花が咲き散って、僅かな日敷の間に栗も丸々と太り、やがて収穫の時を迎えることでしょう。

造物主なる神様は、光と熱と空気と水をもって栗を養い、ここまで大きくさせられた。

ふと、その時私は信仰について探られました。ヨハネ伝十五章ぶどうの木である。

父は農夫、私はぶどうの木、あなた方はその枝である、と

主は説いていらっしゃる。

エス様は、もし人が私につながっており、又私がある人につながっておれば、その人は豊かに実を結ぶようになる。

私から離れては何一つ出来ないからである。あなた方が私につながっており、私の言葉があなた方にとどまっているならば……と。

主の御聖言は、栗の実について考えるならば、光であり熱でもあり水であり空気でもある、栗の命の元である。

同じように、主の御聖言は命であって、私にとどまらなければ太ることが出来ないばかりか、やせ衰えて主の道を歩むことも出来ない。

いつも先生は、「信仰を持ちましょう！ 聖書を読みましょう」とおっしゃって下さる。先生のお心の裡が解ります。枝もたわわに、細い緑の針を着けた、栗の実を通しよくよく教えられた私の午睡でした。

その日その日より



短歌

上野 米子

御聖名と御宝血を崇めて神様の御恩寵を感謝申し上げます。
古き会堂に思いを馳せ歌に託しました。

。大濠の神の園生に蒔かれし実

香りゆたかに花咲き匂う

。大濠のぶどうのみきに結ばれし

安きは神のめぐみなりけり

。帰天せる聖友もぢ偲ぶ会堂に

歴史の糸はほぐれ行くなり

導かるままに歌に託しましたものをその日その日より

。我がために流し給いし御血潮

如何に答えんこの罪の身は

。こころみの中に在りても仕えよと

神の御声を今日も聞くなり

。草は枯れ花はしほむと主はのたもう

命は神のことばなりけり

命の御言葉

瓜生 美知子

私が現在元気に平安の内に教会生活を過ごしていただけるのは、本当に神さまのお恵みです。

十三年前の昭和四十八年に、あるバプテスタの教会で受洗し、伝道の志に燃え、伝道者になりたいと思っていました。残念ながら五十年の十一月、病に倒れてしまいました。

それも神経的な病気だったため、家族の者からは信仰を反対され、教会の牧師先生からさえも、「この人には信仰生活は無理だ」と断わられてしまいました。

私は愕然としてしまい、生きる希望をなくしてしまいました。当時の私には（今もそうですが）信仰は命だったので。自分に失望し、人に失望し、何をしても満たされない生活から救われた私には、十字架の血によってあがなって下さったイエス様をただ信じるしか希望はありませんでした。

病気もショックでしたが、信仰生活が無理だと言われたショックはどうしようもありませんでした。

五十二年に再び元の教会をたずねましたが、その足ですぐ

家に電話され、家族の者からひどく叱られてしまいました。でもでも御言葉には「すべて主の御名を呼ぶ者は救われる」(ヨエル書二・三十二)とあるのにと自分自身に言い聞かせ、信じる者に差別はない筈だと思ったのです。

「ああ、もう一度兄弟姉妹と一緒に神さまを讃美したい。ああ、教会に行きたいなあ」と思いながら、「今は教会にも行かれず、家では聖書をも読めないが、いつかきつと神さまが教会を与えて下さる。主にある兄弟姉妹を与えて下さる」と信じていました。

そしてとうとう五十九年の二月に前田教会の門を叩いたのです。牧師先生をはじめ皆さまから暖かく受け入れていただき、本当に感謝いたしました。神さま有り難うございます。

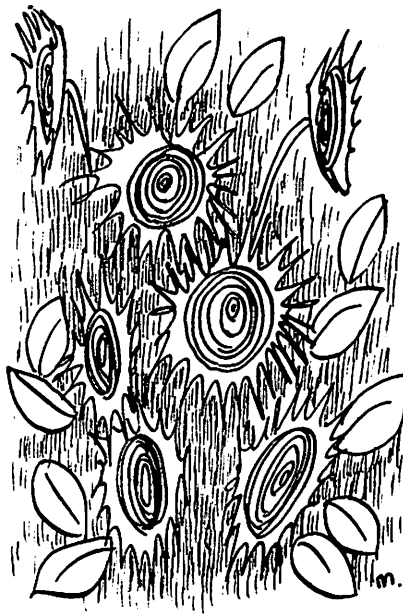
「主よ、あなたの御言葉は我が足のともしび、我が道の光です。主よ、あなたの御言葉に従って私を生かして下さい」

(詩篇一一九・一〇五・一〇七)

五十年から五十九年の九年間、神さまは至る所で私を恵み支えて下さいました。

職場に知人関係にクリスチャンや昔教会に行った事があるという人等、私はその度に励まされ、主イエス様の話を胸をときめかしながらしたものです。

病気との闘いもありますが、今はただすべてを益にして下さる神さまにお任せして、一足一足進ませていただいています。いつも十字架のあがないを素直に受け入れることができるように祈りつつ歩ませていただきます。



主の門

古野 とみ子

「ワハハ……！／＼ おまえは、無神論者だからな！」と、父は戸畑伝道所の門の所で、迎えに行っていた私を、大きな声で笑った。私は、「神様なんかいるものか！いるのだったら、あんなひどい事はしないよ」と思っていた。

それは、私が高校一年の秋の事だった。

「小さなマグロ漁船が、インド洋からの帰途、台風十八号を避けようとして、鹿児島種子島沖で横波をうけて転覆、沈没した」という知らせが届いた。私達家族にとっては、筆まめな兄の便りで大漁の知らせと入港する予定まで聞いていただけに、本当に信じられない知らせだった。

船の消息はわからないままに、幾日も過ぎたある日、「流されたゴムボート発見、二十七人の内四名の乗組員を見つけた」というニュースが流れた。私達は、一瞬喜んだが、あとの乗組員と兄は、帰らぬ人となった。（四名助かったけれども、一人はヘリコプターから落とした食料を取りに波にのまれて流され、もう一人は、救助後病院で亡くなったと言う）

私は、兄の死を通して、「神様というお方は、ひどい事をするものだ」と思っていた。そして、若くとも死んでしまうという事も、なぜだか心にひっかかっていた。それに、父も私達兄弟姉妹の中で溺愛していた息子だけに、ショックはかしくきれなかった様である。老後の事を、この兄に期待していたらしい。

私は家に帰って、父にたらふく文句を言った。神様を信じている先生の前で笑われた事が、ひどく恥ずかしく思えた。それから、父を送迎する事を義母に任せてしまった。勿論、父から「ついて来ないか」と言われていたが、私は「若い私にとって……必要ありません」と心をしめていた。

そんな私が、神様というお方に呼び出しを受けていたとは思ってもいません。ところがある日、私は自分でも不思議だと思ふのですが、姪達と一緒にお昼の日曜学校に行っているのです。月日ははっきりわかりませんが、父が十二月六日に召天したあとの三月頃だったと思います。とにかく、軽い気持ちで父にひきついてという単純な気持ちでした。

伊規須先生から、「夜の大人の集会に来ませんか」と言われて、通う内に神様の大きさ（私の頭から、とび出る位の大

きな方でした。私は創世記が大好きです)に、魅せられて、とうとう教会の門を訪ねるまでになってしまった。

「全能者にして主なる神よ。あなたのみわざは、大いなる、また驚くべきものであります。万民の主よ。あなたの道は正しく、かつ真実であります」(黙示録一五・三)

その日は、なぜだか門が閉まっていた。私は、教会の門はいつも開いているものだと思っていた。どうしてそんな勇気が湧いたのかわからないが、伊規須先生に電話をかけてきた。すると、先生は別の道を教えてくれた。私は言われた通りに行ってみると、閉まっている門の錠はずしながら、年をとった牧師(後で聞くと、父より若かった)が、にこやかに笑いながら、やさしく手招きして下さった(父の召天の時に、すでにお会いしていたらしいのだが)。

私は初めて会った榎本牧師に、「先生、洗礼を受けさせて下さい」と赤面する様な事を言っている。すると榎本先生は、やさしく「貴女は教会生活をまだ知らないから、とにかく教会にいらっしゃい。洗礼は、後でもいいから。お友達には……」と言われました。とにかく、私も友達から教えられた通りに言ったものの、すぐに受けさせてくれるものだと思うだけだったので、私に、それから教会に行く

様になりました。そして、一年後、感動もなく受洗いたしました。私はただ、教会生活が楽しいばかりで、なにもわからなかったのです。だんだん教会生活に慣れて来た頃、色々な問題がいやでも押し寄せて来ます。それに一番苦しい事は、御言葉がわからない事でした。「時が来れば、成就するわたしの言葉」……本当にそうだと思ったのは、イエス様の言葉を聞き始めて五年も経っていました。これまで、あらゆる方法で調べたりしましたが、心の中にひびかないのです。しかし、自分が変わっても、変わらないものがある事を知りました。それから心強くなった事は言うまでもありません。私は、いつも門を見るたびに、出会いの不思議さをつくづく感じます。

「感謝しつつ、その門に入り、

ほめたたえつつ、その大庭に入れ。

主に感謝し、そのみ名を、ほめまつれ」

(詩篇一〇〇・四)

万歳！ 万歳！

X・Yの書簡

【クリスマス万歳！】（XよりYへ）

イエス様 万歳

十字架がすべて

神がなされたことがすべて

すべてが終った……もう何も無い

ただ「万歳」だけがある。

人は何かをプラスしようとする

知るためになにかしよう

潔められるためになにかしよう

聖霊に満たされるためになにかしよう

信じるためになにかしよう、と

私がそれをしようとした時——しなければならぬと——

私の中の小さい火も消えかけた

十字架があった 声があった

「すべてが終った 十字架に終った」と

主は終りとなるために来て下さった。

今日

クリスマス万歳 クリスマス万歳

【主は王となられた】（YよりXへ）

クリスマス万歳！ クリスマス万歳！

主は王となられた

主の戦いが始まり 我らは召されて収穫の働き人

新しき歌を歌いつつ 日々にペラカの感謝

主は替むべきかな！

(一九八五・一一・二三)



新しい病院

野口米子

聖言を通して

匿名

赤いレンガを積み重ねた素敵な建物

でもそれぞれの 大きな窓には

やはり冷たい鉄の金具

昔のようにそれは 黒い格子でなくても

モダンな模様の囲いでも

やっぱり鉄格子に 変わりありません

ガラガラと窓を大きく開けて 空を見る

でも その空には 模様があるので

黒い鉄の模様が あるのです

たまの散歩の時に見る空 青い空

その時には 私のそば近くに

白い服を着た人が 居るので

かならず付いているのです

広い 広い 空の下 なんにもない空の下

一人で歩いて みたいない

昭和五十九年記す

己れに都合の良い状態にしていたときだけ、感謝感
謝と喜んでいる自分に気がつき、恥ずかしく思っています。

主が喜び給うとき喜び、主が悲しみ給うことを悲しむ、潔
い信仰にしていたきたいと願っています。

回りの事情による悩みも敵しいものですが、自分の信仰の
弱さによる内的な悩みには、また違った苦しさがあります。

しかし、ふと気がつくと、そんな中でも、どこか安心して
いる自分に気がつきます。

主が、

「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。

わたしはあなたの名を呼んだ、

あなたはわたしのものだ。

あなたが水の中を過ぎるとき、

わたしはあなたと共にいる。」

(イザヤ四三・一〜二)

と呼びかけ、決してお離れにならないからです。

主の御旨が見えなくなってしまうような、それほど不信仰な状態でも、主はそばにいてくださることを知らせてくださいます。

そんなとき、主の愛が慈父のような身近さに感じられ、大変慰められ感謝いたしております。

「わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。」

(イザヤ四六・四)

「神の受けられるいけにえは砕けた魂です。」

神よ、あなたは砕けた悔いた心を

かろしめられません。」

これは私のような者には大変恵みです。この恵みがないと一度の失敗もできません。

今まで何か敵しいもののように思えたこの聖言が、実は主の慈愛の御手であり、全きあがないの御手であることを教えていただき感謝いたしております。アーメン。



正野のおじいちゃん

熊谷 千代子

月日の経つのは早いもので、正野のおじいちゃんが昇天されて六か月にもなりました。

先頃、エステル会の例会の折、おじいちゃんの記念会も行われまして、恵まれたひと時を過ごさせていただき感謝でした。家に帰りまして、確かおじいちゃんは俳句をたしなまれていたことを思い出し、「ぶどうの木」を探して開いてみました。やさしく柔和な、そしてほのぼのとした作風は、おじいちゃんならではの傑作ぞろい。そこで、おじいちゃんを記念するため、「ぶどうの木」第十二号に登載された俳句「妻と十二月」を書かせていただきます。

- 一月 世の隅に 妻と老いけり 小豆粥
松の内 だけもと妻の かくし紅
- 二月 妻病めば 一人の夕餉 寒玉子
着ぶくれて 妻ころころと 出てゆけり
- 三月 病む妻に 彼岸団子を 買いにけり
- 四月 探梅や 妻の後おす 女坂

旅の荷に 妻の替足袋 加えけり
五月 木の芽和 頁繰るごと 妻癒えて
六月 うたたねの 妻の団扇を 借りにけり
常になき 朝寝の妻に 声かけて
七月 妻旅へ 糠漬のカビ 梅雨兆す
八月 妻の病む 窓辺にゆたかに 水を打つ
九月 湯上がりの 妻にもビール すすめけり
十月 小春日や 妻に付き合う 小買物
十一月 身に沁むや 妻を支える 松葉杖
よく眼鏡 忘れる妻や 冬ごもり
十二月 うそ寒や 妻が匂わす 貼薬
それから第十号の方にも一句
妻病めば あきらめにけり 花の旅
おじいちゃんは、岡山の隆士さんの所へおばあちゃんと二人づれで行かれました。その度ごとに、必ずお土産にと吉備ダンゴをいただきました。いつもニコニコとゆったりしたお氣持で過ごされ、信仰によりさらに内なるものが整えられて、本当にすばらしいおじいちゃんでした。子供さんみんなが、おじいちゃんゆずりのおおらかな方ばかりで、すばらしい御家族だと思えます。

永遠の課題（蛙の子は蛙）

古野 とみ子

「恵まれた女よ、おめでとう。主が、あなたと共におられます。」（ルカー・二八）

◎ 「シモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った。『主よ、わたしから離れて下さい。わたしは、罪深い者です。』」（ルカ五・八）

神様思いでいたい私。でも、現実はきびしいもの。言った事が、なかなか実行できない。そんな時こそ、一言あやまれば……。でも、素直になれないもどかしさ。神様を前にして、などとカッコつけながら、いつも、横目で伺ったり、時には主を後において、邪魔者にして、自分の思いばかり通してしまふ罪人です。ダメクリスチャン。

◎ 「イエスは、彼らに言われた、『あなたがたの信仰は、どこにあるのか。』」（ルカ八・二五）

思い高ぶり易い私。イエス様に言われて、ハッとする。

……早く、悔い改めて……「ごめんなさい！」と言って従えば、良い子なのに、高慢な私です。（本心はどこ？）

◎ 「イエスは言われた、『わたしに、さわったのは、だれか。』」（ルカ八・四五）

病気で床に伏している時、私もフト、イエス様の衣にさわりたい思いでいっぱいです。そして、その衣の手ざわりを覚えながら、イエス様から「娘よ、あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい」と。言われるお言葉に、従わせていただきます。イエス様、大好き。

◎ 「道を進んで行くと、ある人がイエスに言った、『あなたが、おいでになる所なら、どこへでも従ってまいります。』」（ルカ九・五七）

私の願いを聞いて下さるのに、感謝もなく、つぶやきの出る不信仰な者です。悔い改める事もなく、自分の思いで走っている姿を、イエス様はどんな思いで見ているのでしょうか。そんな時、イエス様からお言葉をいただきました。

「イエスは言われた、『手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくないものである。』」（同六）

◎ 「どこかの家にはいったら、まず『平安がこの家にあるように』と言いなさい。」（ルカ一〇・五）

福音旅行をしていて、いつも訪れた玄関に立たせていただくこの尊いお恵み。——遠方であればある程感じる御愛——この大きな愛を伝えたいと感謝して祈ることの喜び。——さあ！ 主の御用だ。ありがとうございます。

◎ 「イエスを試みようと言った、『先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか。』（ルカ一〇・二五）イエス様、ごめんなさい。あなたの福音を伝えたいと祈りながら、時には、あなたを試みました。試みることは、什一献金の他にしてはならないと教えられていました。そんな罪深い私でさえも、永遠の生命を下さっている事を感謝いたします。

◎ 「すると、ある人がイエスに、『主よ、救われる人は少ないのですか』と尋ねた。」（ルカ一三・二三）

私はいつも疑問だった。神様から選ばれる人もいれば、なかなか選ばれない人もいる。なぜ！ 二人共（私と義母）一緒に救って下さらなかつたのかと、つぶやいた日もある。

そして、イエス様の言葉を聞いた。

「ふたりの女が一緒にうすをひいているならば、ひとりを取り去られ、他のひとりに残されるであろう。」（ルカ一七・三五）

◎ 「イエスに『神の国で食事をする人は、さいわいです』と言った。」（ルカ一四・一五）

救いにあずかって、六年目が来ました。

祈りの足りない不信仰な者を、今日まで、神様はあわれんで下さり、守り支えられて来ました。どんなに大きな愛を注いで下さっているのか。……本当に、ありがとうございます。また、教会の先生方と多くの聖徒方の厚い祈りの賜物であることを、心から感謝いたしております。

◎ 「『さあ、おいでください。もう準備が、できましたから』と言われた。」（ルカ一四・一七）

イエス様の道から外れてしまった私。仲保者であるあなたのメンツ……立たない事をどうかお許し下さい。

◎ 「もしあなたに対して一日に七度罪を犯し、そして七度『悔い改めます』と言ってあなたのところへ帰ってくれば、

ゆるしてやるがよい。」(ルカ一七・四)

イエス様の心の大きさを知りました。

だのに……なぜノ ユダ(とみ子)は、裏切ったのか?

十字架にかかる前、どんな御思いで食事の席につかれたのでしょうか。(愛する十二人の弟子たちと共に、最後の晩餐)

われ罪人の かしらなれども

主は、わがために 生命をすてて

つきぬいのちを あたえたまえり。

(讚美歌二四九)



千葉時代の子供達の記録

正野 真宏

私達一家は、仕事の関係で三年ばかり千葉に行っていたことがある。正確には、昭和四十九年四月から昭和五十二年十月まで三年七ヶ月間、千葉市真砂町という所に住んだ。

子供達は今は高三、高二となったが、行った当時はまだ二人とも幼稚園児であった。

私は、九州を離れての貴重な日々であるので、柄にもなく日記をつけていたが、久しぶりに読み返してみると、十年前の(私をもっと若かりし頃の)事がいろいろ思い出されて懐かしかった。やはり記録は取っておくものである。

さて、今回は子供の記録に関するものの中からおもしろそうなもの(と言っても私が面白いただけで皆様には何でもない事かもしれませんが)載せてみました。なお、先に断わっておきますが、これは子供達には無断で出しておりますので、内緒(ナニモナイシヨ)にネ。

◎ 親子の会話

(その一) 謙一のへりくつ

謙一が寝ているのぞみの手を誤って踏んだ。途端にのぞみが泣き出す。謙一は知らないでやったのだからと謝らない。

ママ「知らないでやっても、相手に痛い目に会わせただから謝りなさい」

謙一(シブシブ仕方なさそうに、あさつての方を向いて)

「ごめんなさい」

パパ「謙一、人に謝る時は、心からそう思って謝らなければいけない」

謙一「じゃ、心の中で思っていれば、それでいいじゃないか」

心の中は人にはわからないという知恵が働いて、なかなか素直に謝らない。(七才)

(その二) のぞみの計略

のぞみ「パパ、神様はどこなところでも見えるの」

パパ「そうだよ」

のぞみ「本当!」

パパ「本当だよ」

のぞみ「それじゃ、何にもないとこも見えるの」

パパ「………見えるさ………」

のぞみ(手を叩きながら)「オー、オー、珍し、はぶらし、

とんがらし」(当時のやり言葉)

どうやら私は、ワナにはまったらしい。(五才)

(その三) 謙一とテスト

学校のテストの点が悪かった。

ママ「ごらんなさい。勉強しないからでしょ」

謙一「いいんだよ。親の責任ではないんだから」

ママ「………」(七才)

(その四) 謙一の将来

謙一「僕、今、野球の選手になるか、教会の先生になるか考えているんだ」

パパ「そりゃ謙ちゃん、教会の先生の方が貴い仕事だよ」

謙一「どうして?」

パパ「それは神様の御用だもの」

謙一「そうだね」

パパ「野球の選手は、お金はもうかるかもしれないけど、神様の御用じゃないものね」

謙一「教会の先生だって、献金をいっぱい値上げしてもらえ

ばいじゃないか」

パパ「……………」(八才)

◎ 誕生日のお祈り

のぞみの誕生日のお祝いがすんで

のぞみ「今日で楽しい誕生日が過ぎてしまいました。来年も

早く来るようにして下さい」

——続いて謙一のお祈り

謙一(うれしそうに)「神様、今度は僕の番です」

(謙一七才・のぞみ六才)

◎ 謙一、のぞみ寢床での会話

(襖ごしに——謙一八才・のぞみ七才)

(その一)

のぞみ「お兄ちゃんが結婚する時、自分の好きな人とする。

それとも神様がこの人としなさいと言われた人とする、ど

っち?」

謙一「そりゃ、神様が言われた人とするよ」

のぞみ「私も神様を信じてる人とする」

——初志貫徹してくれよ——



(その二)

謙一(悪魔の話しになってのぞみに)「僕がのぞみをいじめ

ようと思うだろ。そうしたら、そんなことしたらいけない

と神様から教えられるんだよ。そしたら、僕迷っちゃうん

だ。その時のぞみをいじめるだろ、そしたら、悪魔が喜ん

で、神様が悲しまれるんだよ」

のぞみ「ふうん」

——へェ、そんなこと考えてるのかなあ——

(その三)

のぞみ「お兄ちゃん、何か悪いことするでしょ。もし神様ご

めんなさいと謝ったら、本当に天国に行けるの」

謙一「心から悔い改めなければだめだよ」

——わかって言ってるのかなあ——

◎ 失った草履

謙一が友達と近くの神社の池へオタマジャクシを取りに行つて、ドブの深みにはまり、買ったばかりの草履が足から抜けてしまった。失したら叱られると思つて、一生懸命に探したが見つからない。あきらめて裸足のまま近くで遊び、帰りに池を見ると、当の草履がポツカリ水面に浮んでいたというのだ。彼は言う「僕は草履が見つかるよう二度もお祈りしたんだよ」(八才)

◎ 聖言

謙一が日曜学校から一人で帰らねばならなくなった。東京葛飾区の金町教会から自宅まで乗換えが三回、一時間半はかかる。果たして一人で帰れるかどうか私も心配であるし、また本人も不安があるはずです。

その時、謙一いわく「パパ、聖書に何処へ行つても、主が共におると書いてあるから大丈夫だよね」

——適切な聖言に驚く—— (八才)

◎ 子供とお灸

今日の礼拝で、謙一とのぞみが騒いだ。

家内が注意に行つたが、しばらくするとまた騒ぎ出し、あげくのはては喧嘩をする。それが二、三度あったので、一度お仕置をする必要があるということになった。

何が良いかと考えたが、ふとお灸のことを思い出したので、それに決めた。家内に婦りに買ってくるように言つて、私達は先に帰つた。

子供には、今日は許さないからお灸をすると申し渡しておいた。子供は最初の内「お灸って何ね」とか言つて面白がつていたが、お灸の恐しさがわかつてくるに従い、だんだん真剣な顔になってきた。

家内が買物をして帰つて来た。

当然モ草を買つてきていると思いきや、家内の方は本当にやるとは思わなかったらしい。それでも私から請求されて、何か白いものを取り出してそれをもんでいる。

確か、モ草はもつと煙草色したものはずだが……と不審に思つたが、それこそお灸なぞ子供の時以来見ていないので、

多分最近の新しいモ草なんだろうと一人で決めて思い込んでいた。なんと、それはチリ紙だったのである。(後で聞いて大笑いした次第)

家内は私をも騙むいて、子供達につけるといってそれをちぎり、お灸の形を作って、まずのぞみの指先につけた。

ところが軽いので、つけるはしから鼻息で落ちてしまう。そこで家内は強力接着ボンドを取り出し、それで接着させている。私の方は、面白いモ草だなといぶかりながらも、まだ騙されている。

のぞみは、まだまだ軽く考えていたようであるが、いよいよマツチをつける時になった時、恐しさが頂点に達したのであろう、突然、室の中を走り出し、泣きながら「誰れか助けて！ 誰か助けてちょうだい！」と叫び出した。

私達は、あっけにとられてしまった。と同時に、のぞみの気持、立場がよくわかった。彼女は罰は受けたくない。しかし、それから逃れることができない。誰かに助けてもらいたい。普通ならば、パパかママが助けてくれる。しかし、今は二人とも刑の執行者である。どこにも助けてくれる人はいない……。それがわかっていても、そう叫ばずにはおれないのだ。

私は泣けてきた。勘弁してやりたいとどれだけ思っただろう。あわれでならなかった。中に立つてとりなしてくる人はいないものか。

父なる御神の御気持がいくらかわかった。十字架以外に方法はないのだ。

もし、十字架の贖いがなく、私が生ける神の裁きの前に立った時、のぞみと同様に「誰か助けてくれ！」と叫ぶに違いないのだ。誰も助けてくれる人はいないとわかっていても、なお助けを求めらるだろう。

のぞみの心の底から出た叫びが、私の心を痛ませた。彼女はモ草のついた手を支えながら、泣いて室中を歩き廻る。そしてとうとう「パパ、ママごめんなさい」と謝った。謙一も泣きながら謝った。

私達もほっとして、許してやることにした。もっとも、チリ紙ではお灸はできなかったのだが……。それから後の二人は、以前よりずっと素直になった。感謝である。



柴田しか姉をしのびて

都 島 あさ子

柴田姉がここ津屋崎の聖愛ホームに入居されての十二年間、お交わりをさせて頂きました。入居当時のお若くお元気だった頃の柴田姉、一年一年とお弱くなられて、遂に御入院。

そして入院中と在りし日の柴田姉の姿が次々と目に浮び、天国にお見送りしたばかりの今、あのすばらしい生きざまを残したく、思わずペンを取りました。

柴田姉はとにかく聖書をよく読まれ、みことばの人でした。長い長い信仰生活で得られたその温かいお人柄は、誰に対しても心をなごませるものがありました。毎日の生活もホームでの一人部屋に身を置きながらも、常に主にあつての生活は、いつもお顔が輝いておりました。私は聖書を読む時間を得る為に入居したのだと言われていたが、ホームの雑用を全部一手に引き受けられるばかりに、聖書を読む時間がないとて、朝の暗い中に起きて聖書を読んでおられました。又お元気な頃の柴田姉はお料理が好きで、よく珍しい料理をテレビで見たとて作られたのを私達よく頂いたものでした。そしてお礼を

述べると天を指差し、お礼は私にはではなく、あそこに言いなさいとの事には参りました。

又、こんな良い宗教を何で人は知らないのかとバスの中、行きずりの人などに神様のお話をしてやったと度々聞いておりましたが、自分だけでなく、多くの人達にもこのお恵みを分かちたい思いがいっぱいだった様です。いつか私が朝お訪ねした時にも、早朝海辺にお祈りに行った時に初めて知り合ったばかりだという人を連れて来て、朝食を差上げてあった事も思い出します。又柴田姉は本当に地上の物欲の全くない珍しいお方でした。それでも知識欲は旺盛で、見たり聞いた事事は必ずノートに書きとどめてあったのには、いつも感心いたしておりました。ノートや紙きれには、みことばがいっぱい書きとどめてありまして、これが私の唯一の遺産だと笑ってありました。

讚美歌は二七三番Bが大好きで「沈むばかりのこの身を守り……」のところでは手ぶりまでして口にしてありました。が、いろいろな試練を通して来られた事を知る者としては、如何にも柴田姉の愛歌らしいいつも思っておりました。嬉しい事や悲しい事にめぐり逢ったその都度、先ず一番に神様に申し上げ、聖書を開いてみことばによって強められてお

られました。喜びの時には感謝をささげ、一人暮らしの淋しさなどは全く聞きませんでした。そうして私には祈る事が出来るから幸せだといつも言っていてあったそのお顔を今なつかしく思い浮かべます。

晩年は、よくエス様の花嫁様になる準備中だと言っておりましたが、そのお言葉を思い出し、口紅をつけて頂いて天国へと旅立たれたそのいとも安らかなお顔に接し、思わず涙が溢れました。この地上ではもうホームに行っても、病院に行っても、お目にかかる事は出来ない、生前のあの姿や語りをお目にかかると思い出しては急に淋しくなります。

人間どうしても一度は死と言うものを迎えねばならないのだけど、いよいよそこに行くまでの老後を、あんなに喜び、感謝して受け入れ、準備が出来、安心して死を迎えられるとは……。それはやはり信仰であり、何とすばらしい事ではないかと、柴田姉の御召天までのお交わりを通して、弱い私はしみじみと考えさせられました。

柴田姉は、この世的には決して恵まれ過ぎると言う境遇ではありませんでした。あの中からあの喜び、感謝は、唯すべてをみこころのままにと神様に一切をお任せしてしまっただけの固い信仰だろうと思えまして、私はいつもあの様に素直

に、ただ信じられたらどんなに良いだろう、何物にも替え難い宝だろうといつも羨しく思っておりました。

今は、柴田姉にとっては一番良い天国に行かれ本望でしょう。御年八十七才でした。

こうしたすばらしい証人とお交わりをさせて頂きました神様のお恵みに改めて感謝いたします。そして唯称讃するだけでなく、このすばらしい柴田姉の足跡に少しでも近づき、歩きたいものだ切に神様をお願いいたしております。



編集後記

。「ぶどうの木」第十六号をお届けします。編集などに手間どり遅くなりましたことをおわびします。

。第十五号を発行して一年、この間、教会にもいろんな事がありました。特に本年四月、基督伝道隊戸畑教会が設立されたことは、神様の大きな恵みであり、導きでした。

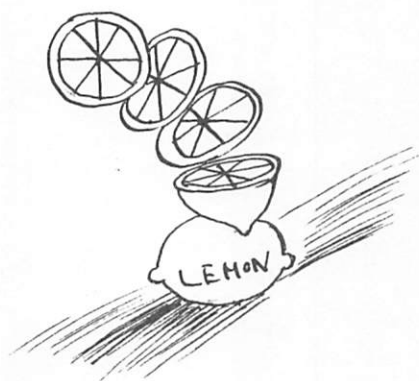
現在、伊規須先生御夫妻によって伝道の業がなされております。

。このため「ぶどうの木」は、八幡前田教会、大濠公園教会、戸畑教会の基督伝道隊三教会合同の証し誌となりました。

。今回は投稿者が多くて、表紙の目次に入りきれませんでしたので、目次を中に入れて表紙のパターンを変えてみました。

。表紙の絵は水村光義兄、カットは小松端枝姉です。

昭和六十一年九月



昭和62年3月15日発行

編集者 ぶどうの木委員会

発行者 基督伝道隊

榎本 利三郎

印刷所 トンボ印刷所

発行所 基督伝道隊

福岡大濠公園教会

戸畑 教会

八幡前田教会

北九州市八幡東区前田1-10-3